静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第55集

渕ヶ沢遺跡Ⅱ

新東名 No.27-1 地点

新東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

沼津市－12

２０１７

中日本高速道路株式会社東京支社
静岡県埋蔵文化財センター

序

渕ヶ沢遺跡は、世界遺産である富士山の南に位置する、愛鷹山南麓の緩斜面に立地する遺跡です。

今回の調査は、旧農道にあたる未調査部分を対象としたもので、新東名高速道路に関する渕ヶ沢遺跡の最後の調査となりました。

検出された遺構・遺物は僅少でありますが、発見された３基の旧石器時代の礫群や、テストピット調査で検出された剥片（第Ⅳ黒色帯）など、過去の調査の成果を補強する成果も少なくありません。

本書が研究者のみならず、県民の皆様に広く活用され、地域の歴史を理解する一助となることを願います。

最後になりましたが、本発掘調査にあたり、中日本高速道路株式会社東京支社ほか、関係機関の御援助と御理解をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

2017 年２月

静岡県埋蔵文化財センター所長
堤　　敏　幸

例　　言

1　本書は、静岡県沼津市根古屋(しずおかけんぬまづしねごや) 958 － 12 他に所在する渕ヶ沢(ふちがさわ)遺跡の発掘調査報告書である。

2　調査は、新東名建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査業務として、中日本高速道路株式会社の委託を受け、静岡県埋蔵文化財センターが実施した。

3　渕ヶ沢遺跡の現地調査及び資料整理の期間は以下のとおりである。

現地調査　　平成 27 年 10 月～平成 28 年３月　　実掘面積 1,487 ㎡

資料整理　　平成 28 年７月～ 11 月

4　調査体制は以下のとおりである。

平成 27 年度

所長　赤石達彦　　次長兼総務課長　田中雅代　　調査課長　中鉢賢治

主幹兼事業係長　杉山智彦　　主幹兼総務係長　大坪淳子

主幹兼調査係長　富樫孝志　　主幹　中川律子　　主査　岩本貴　　主任　木崎道昭

平成 28 年度

所長　堤敏幸　　次長兼総務課長　田中雅代　　調査課長　中鉢賢治

主幹兼事業係長　杉山智彦　　主幹兼総務係長　土戸美樹

主幹兼調査係長　富樫孝志　　主幹　笹原千賀子　　主査　岩本貴　　主任　木崎道昭

5　本書の執筆は木崎道昭、竹原弘展（株式会社パレオ･ラボ）が行った。分担は以下のとおりである。

第１章～第４章については、笹原千賀子・中鉢賢治が加除修正を行い、全体の調整を図った。

第１章～第４章　木崎道昭

付編　　竹原弘展

6　本書の編集は静岡県埋蔵文化財センターが行った。

7　現地作業、資料整理、報告書刊行にかかり、実施した委託事業の委託先は以下の通りである。

平成 27 年度	掘削業務委託	株式会社関道建設
	測量業務委託	株式会社シン技術コンサル
平成 28 年度	整理作業業務委託	株式会社パソナ
	黒耀石産地推定業務委託	株式会社パレオ・ラボ

8　発掘調査と整理作業では、以下の方々に御指導、御助言を賜った。厚くお礼申し上げる。

上杉陽　前嶋秀張　（五十音順・敬称略）。

9　発掘調査の資料は、すべて静岡県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

本書の記載については、以下の基準に従い統一を図った。

1　本書で用いた遺構・遺物などの位置を表す座標は、すべて平面直角座標第Ⅷ系を用いた国土座標、世界測地系を基準とした。

2　調査区の方眼設定は、上記の国土座標を基準に設定した。
（Ｘ＝Ａ，Ｙ＝１）＝（－ 93750.0、28040.0）

3　出土遺物は通し番号（＝遺物番号）を付して取り上げた。

4　遺構図、遺物実測図の縮尺は、図ごとに適当な縮尺を用い、それぞれにスケールを付した。

5　色彩に関する用語･記号は､新版『標準土色帳』（農林水産省技術会議事務局監修 1992）を使用した。

6　土層名は、第２章第２節の土層柱状図（第６図）に表示した名称を用いる。

7　下記の図については国土地理院発行地形図を複写し、加工・加筆した。
第１章第１節　渕ヶ沢遺跡位置図（第１図）１：50,000 地形図「沼津」
第１章第３節　周辺遺跡分布図（第２図）　１：25,000 地形図「沼津」

8　遺構に関する表記（略記号）は以下のとおりである。
SK：土坑　　RG：礫群　　SY：集石

9　本文や引用・参考文献の記載にあたっては、以下のように統一した。
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研
静岡県教育委員会→県教委
静岡県埋蔵文化財センター→県埋文センター
（各）市・町教育委員会→（各）市・町教委

10　写真図版８の個々の遺物は、挿図記載遺物番号を付した。

目　　次

序
例言
凡例

第１章　調査に至る経緯と遺跡の環境
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　自然的環境 …… 2
　第３節　歴史的環境 …… 2

第２章　調査の概要
　第１節　調査の方法と経過 …… 7
　第２節　土層 …… 9

第３章　調査の成果
　第１節　遺構 …… 16
　第２節　遺物 …… 24

第４章　まとめ …… 29

付編　渕ヶ沢遺跡出土黒曜石製石器の産地推定 …… 32

写真図版

抄録・奥付

挿図目次

第１図　渕ヶ沢遺跡位置図 …… 1
第２図　周辺遺跡分布図 …… 5
第３図　過去の調査区配置図 …… 7
第４図　調査区配置図 …… 8
第５図　テストピット配置図 …… 10
第６図　土層柱状図 …… 11
第７図　２区土層図 …… 12
第８図　テストピット土層図１ …… 13
第９図　テストピット土層図２ …… 14
第 10 図　第１面遺構全体図 …… 17
第 11 図　第１面遺構個別図 …… 17
第 12 図　第２面遺構全体図 …… 18
第 13 図　第２面遺構個別図 …… 19
第 14 図　第３面遺構全体図 …… 20
第 15 図　１号礫群実測図 …… 21
第 16 図　２号礫群実測図 …… 22
第 17 図　３号礫群実測図 …… 23
第 18 図　出土土器実測図 …… 24
第 19 図　出土石器実測図（縄文時代） …… 25
第 20 図　出土石器実測図（旧石器時代） …… 27

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 4
第２表　第２面遺構一覧表 …… 19
第３表　１号集石礫計測表 …… 19
第４表　第３面遺構一覧表 …… 21
第５表　礫群礫計測表 …… 23
第６表　出土土器観察表 …… 24
第７表　出土石器計測表 …… 28

挿写真目次

写真１　表土除去作業状況 …… 15
写真２　テフラ等現地指導状況 …… 15
写真３　テストピット下段の掘削作業状況 …… 15
写真４　石器のデジタルトレース作業状況 …… 15

写真図版目次

図版１　１　第１面完掘状況（南から）
　　２　第２面完掘状況（南から）
図版２　１　第３面完掘状況（北西から）
　　２　２区北側土層断面１
　　３　２区北側土層断面２
図版３　１　１号土坑完掘状況（西から）
　　２　２号土坑完掘状況（南から）
　　３　３号土坑半截状況（南から）
　　４　３号土坑完掘状況（西から）
　　５　４号土坑完掘状況（北東から）
　　６　５号土坑完掘状況（南から）
　　７　１号集石検出状況（南から）
　　８　１号集石半截状況（南から）
図版４　１　１号礫群（南東から）
　　２　１号礫群に伴った尖頭器（南東から）
　　３　２号礫群（北西から）
図版５　１　３号礫群（南東から）
　　２　１～３号礫群とその周辺の遺物出土状況（南東から）
　　３　第Ⅳ黒色帯石器出土状況（TP ５）（北から）
図版６　１　新期スコリア層～栗色土層中の遺物出土状況（南から）
　　２　１区北側富士黒土層中の遺物出土状況（北から）
　　３　２区富士黒土層～漸移層中の遺物出土状況（南東から）
　　４　TP １北壁土層断面（南から）
　　５　TP ２北壁土層断面（南から）
　　６　TP ３東壁土層断面（西から）
　　７　TP ４北壁土層断面（南西から）
　　８　TP ５東壁（北側）土層断面（西から）
図版７　１　TP ５東壁（南側）土層断面（西から）
　　２　TP ６北壁土層断面（南西から）
　　３　TP ７東壁土層断面（北西から）
　　４　TP ８北壁土層断面（南東から）
　　５　TP ８東壁土層断面（南西から）
　　６　TP １・２完掘状況（南東から）
　　７　TP ３・４・７・８完掘状況（南西から）
　　８　TP ５・６完掘状況（北東から）
図版８　１　出土土器
　　２　出土石器（縄文時代）
　　３　出土石器（旧石器時代）１
　　４　出土石器（旧石器時代）２

第１章　調査に至る経緯と遺跡の環境

第１節　調査に至る経緯

新東名高速道路は、神奈川県海老名市から静岡県を経由し、愛知県豊田市に至る高速道路である。1993 年から長泉沼津インターチェンジ（以下 IC と略）と豊田東ジャンクション（以下 JCT と略）間で、1998 年から御殿場 JCT と長泉沼津 IC 間で工事がスタートし、2012 年４月 14 日に御殿場 JCT と浜松いなさ JCT 間が開通する運びとなった。

本遺跡の位置する、沼津市根古屋、西野一帯は新東名高速道路建設にあたり、サービスエリア（以下 SA と略）の設置が予定された。高速道路本線部分を含め、広大な SA 建設予定地内の埋蔵文化財としては、No.25 地点（秋葉林遺跡）、No.26 地点（的場遺跡・的場古墳群）、No.27 地点（渕ヶ沢遺跡）が該当した。この３箇所の遺跡に関しては、静岡県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センターと略）の前身組織である、（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所（以下、静文研と略）が調査を受託し、確認調査・本調査を行った。調査は平成 11 年１月の秋葉林遺跡の確認調査から開始され、平成 10 ～ 15 年度に大半の調査が行われた。この後、平成 18 ～ 20 年度に未調査部分の調査を行い、SA 建設予定地内の調査は、今回の渕ヶ沢遺跡の調査地点を除き全て終了した。当該地は新東名の開通と同時に、駿河湾沼津 SA（NEOPASA 駿河湾沼津）として開業した。

渕ヶ沢遺跡については、平成 11 ～ 15 年度と 20 年度に確認調査と本調査を行っているが、調査工程等の関係から、遺跡の北側部分を静文研、南側部分を沼津市教育委員会（以下沼津市教委）が担当する

第１図　渕ヶ沢遺跡位置図

こととなった。これにより、静文研調査部分を№.27 －１地点、沼津市教委調査部分を№.27 －２地点とした。

今回の調査は、ヘリポート建設のための調査であり、過去の本調査区１～３区に挟まれた南北農道と東西農道の跡地である。共同所有地であったため、過去の調査時点では未買収であった（第３図）。

第２節　自然的環境

渕ヶ沢遺跡は、愛鷹山南麓の裾野に位置する（第１図）。標高は、№.27 －２地点まで含めれば、約165 ～ 110 m程あり、遺跡内の比高差が大きい。今回の調査地点の標高は約 164 ～ 144 m程度であり、遺跡の最上部に位置する。遺跡の立地する愛鷹山南麓は、高橋川が刻む谷を境界にして、地形の様相がかなり異なっている。本遺跡の立地する西側は、火山麓扇状地としてかなり深い谷に刻まれた地形である。また南に向かってきわめて急傾斜であり、山麓の末端部は浮島ヶ原の堆積物の下に埋もれている。高橋川の谷より東側は火砕流堆積面の張り出し原面が良く残っており、全体として、放射谷は西側に比べて浅い（町田他 2006）。このような地形上の相違は旧石器時代の遺跡のあり方に影響を与えていると考えられ、特に陥穴状の土坑の分布範囲との関連は今後の課題であると思われる。

愛鷹火山は富士火山の南南東に接する。麓の直径は約 15km 以上の成層火山である。活動期間は約 40 万年～ 10 万年前に及び、箱根火山の活動期と重なる。愛鷹山南麓にはテフラが厚く分布するが、その中・上部のほとんどは富士山を主とする他の火山から飛来したものである。テフラ群の上部には埋没土壌がよく発達しており、旧石器時代以降の遺跡が包含されている。

第３節　歴史的環境

渕ヶ沢遺跡周辺には旧石器時代から近世・近代に至る遺跡が多数存在し、愛鷹山麓の丘陵部分の先端部に限定すれば、県内でも最も遺跡密度が高い地域の一つである。また、前節でも述べたように、丘陵部分は分厚いローム層に覆われ、旧石器～縄文時代の遺跡が未発見のまま数多く眠っていると推定される（第２図、第１表）（註１）。本節では、今回の調査で遺構・遺物が検出された、旧石器時代、縄文時代早期、縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半、円形土坑が作られたと考えられる中世以降に限定して述べていきたい。

旧石器時代の遺跡は愛鷹山麓の丘陵部分は高い密度を誇る。静岡県内でも箱根山麓や磐田原台地とならぶ代表的な遺跡集中地域である。また、近年の大規模調査においては、丘陵部分のほとんどの遺跡で旧石器時代の遺物が検出されている状況である。

本遺跡周辺の旧石器時代の遺跡としては、本遺跡の近接地域では、ヌタバ遺跡（19）、藤ボサ遺跡ａ区・ｂ区（17・18）、茗荷沢遺跡（20）（静文研 2010 ｂ）、銭神遺跡（21）、鎌ヶ沢（鎌沢）遺跡（55）（県埋文センター 2012 ｂ）、的場遺跡（53）（静文研 2010 ｃ）、秋葉林遺跡（54）（静文研 2009 ａ）、井出丸山遺跡（110）（沼津市教委 2011）、根古屋清水遺跡（116）がある。平沼の遺跡空白地域の西の図示した範囲では、陣ヶ沢Ｂ遺跡（２）、猫山遺跡（６）、吹上遺跡（７）（沼津市教委 1985）があり、大半が第一東名高速道路より北側に分布する。吹上遺跡と根古屋清水遺跡は、丘陵上であるがかなり標高が低く、やや特殊である。本遺跡群の東側、高橋川の谷以東では、井戸川西遺跡（63）、元野遺跡（68）（静文研 2008）、土橋第Ⅱ遺跡（92）、イタドリＣ遺跡（93）、イタドリＢ遺跡（94）、イタドリＡ遺跡（95）

（静文研 2009 ｂ）、伊良宇祢遺跡（69・70）（沼津市歴史民俗資料館 1983）、大廓遺跡（75）、元野第Ⅲ遺跡（90）、元野橋南遺跡（82）、西大曲遺跡（106）（沼津市教委 1980）、洞林遺跡（101）があり、標高の高い地域には、三角遺跡（102）、休場下遺跡（103）、休場南遺跡（104）、休場遺跡（105）（杉原・小野 1965）があるものの、大半が東名高速道路より北側である。

これらの旧石器時代の遺跡では、休場層段階では、基本的に全ての遺跡で遺物の出土が確認できる。AT が包含されるニセローム層以下で遺物の出土が確認されているのは、本遺跡を含めて、管見の限りでは以下のとおりである。渕ヶ沢遺跡（BB Ⅳ、BB Ⅲ）、藤ボサ遺跡ａ区（NL）、鎌ヶ沢（鎌沢）遺跡（BB Ⅲ、BB Ⅱ、NL）、的場遺跡（BB Ⅶ、BB Ⅴ、BB Ⅲ、BB Ⅱ）、秋葉林遺跡（BB Ⅶ、SC Ⅲ、BB Ⅲ、BB Ⅱ、NL）、井出丸山遺跡（SC Ⅳ～ BB Ⅶ、SC Ⅱ～ BB Ⅱ）、元野遺跡（SC Ⅳ、BB Ⅶ、BB Ⅲ、BB Ⅱ、NL）、イタドリＡ遺跡（NL）、西大曲遺跡（BB Ⅲ、BB Ⅱ）。これらはいずれも近年の大規模調査で検出されている。また、愛鷹・箱根山麓で検出される注目すべき遺構として、陥穴状の大型土坑があるが、これが、渕ヶ沢遺跡と鎌ヶ沢（鎌沢）遺跡で発見されている。いずれも第Ⅲ黒色帯から掘り込まれ、第Ⅲスコリア層中に掘り込みを持つという特性がある。また、その発見遺跡の位置関係から、該期の集落と狩猟場の位置的分離を説く説がある（池谷 2009）。なお、本遺跡では出土していないが、SC Ⅳ～ BB Ⅶ層から出土した石器群は、年代が明確で、人類の遺物として確定できるものとしては、日本列島で最古級の石器である。本遺跡周辺で複数の遺跡から発見されているのは注目すべきであろう。なお、本遺跡で遺物が検出されている BB Ⅳ層での検出例は、本遺跡周辺では本遺跡以外にはなく、貴重な例といえるであろう。

縄文時代の遺跡であるが、遺物が検出されている早期の遺跡としては、以下のとおりである。猫山遺跡（６）、吹上遺跡（７）、藤ボサ遺跡ａ区・**ｂ区**（17・18）、**茗荷沢遺跡**（20）、**銭神遺跡**（21）、閑峰遺跡（25）（沼津市 2002）、焼畑遺跡（30）、光厳寺沢遺跡（45）、**的場遺跡**（53）、**秋葉林遺跡**（54）（静文研 2010 ａ）、**鎌ヶ沢（鎌沢）遺跡**（55）、**元野遺跡**（68）、角右衛門アラク遺跡（71）、鳥谷アラク遺跡（80）（沼津市教委 2000）、東原古墳群（81）、元野第Ⅲ・Ⅱ遺跡（90・91）、イタドリＣ・Ｂ・Ａ遺跡（93 ～ 95）、西大曲第Ⅱ遺跡（97）、西大曲遺跡（106）、井出丸山遺跡（110）、根古屋清水遺跡（116）。このうち太字で記したのは、草創期の遺物も出土した遺跡であるが、土器は発見されておらず、有舌尖頭器等の草創期特有の石器から判断した。

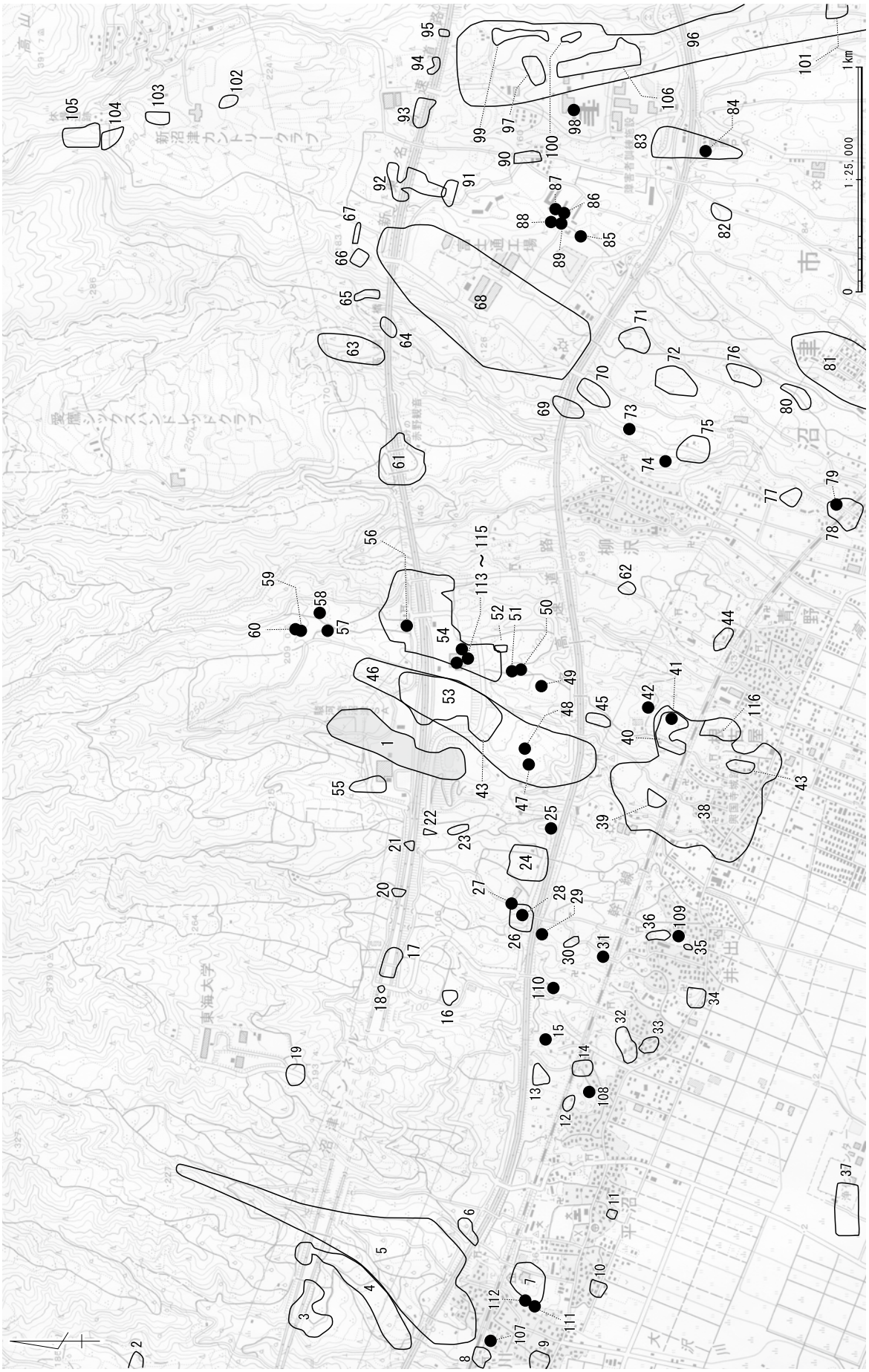
早期の遺跡は、旧石器時代と重なる例が多い。また、縄文時代から開始される遺跡は、旧石器時代の遺跡に比べて、丘陵上ではあるが、標高がやや低くなる傾向が看取される。愛鷹山麓の丘陵上を大規模に調査すれば、縄文早期の土器はほとんど普遍的に出土するので、将来的には遺跡数が増大することが予想される。ただし、大規模調査された遺跡であっても、早期段階においては、竪穴住居の発見例は極めて少なく、移動性の高い生活を営んだ痕跡が、本遺跡周辺に残されているといった趣である。

縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半の遺跡は、県内でも最も遺跡の少ない時期であり、本遺跡周辺でも同様である。縄文時代後期段階で僅かに見られた丘陵上の遺跡は、現状では全く見られなくなる。管見の限りでは、葱川遺跡（11）（小野・笹津 1971）、雌鹿塚遺跡（37）（沼津市教委 1990）くらいである。葱川遺跡は早くから知られた遺跡で、丘陵の末端部から低地に移行する箇所に立地する。氷Ⅰ式土器、氷Ⅱ式や樫王式併行の土器、丸子式土器等が出土している。雌鹿塚遺跡は、浮島ヶ原の低湿地に位置する遺跡で、西日本系の黒色磨研土器や、突帯文土器が出土している。

最後に円形土坑が構築された時期と思われる中世・近世である。吹上遺跡（７）、**藤ボサ遺跡ａ区**（17）、**銭神遺跡**（21）、阿野氏館（34）（静岡県教育委員会 1981）、興国寺城跡（38）（沼津市 2002）、**秋葉林遺跡**（54）（県埋文センター 2012 ａ）、元野馬牧土手（65 ～ 67）、石川の栗田氏屋敷跡（107）、平沼の土橋（108）（中野 1983）、井出氏屋敷跡（109）、根古屋清水遺跡（116）などがある。なお、太字は本遺跡と同様な、あるいは類似する円形土坑が検出された遺跡である。中世・近世の遺跡は大別し

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時代
1	渕ヶ沢遺跡	旧石器、縄文草創～後期、弥生前期？、弥生以降（円形土坑他）
2	陣ヶ沢Ｂ遺跡	旧石器、縄文、古墳
3	長坂遺跡	縄文前期
4	小坂上北遺跡	縄文中期、弥生後期、古墳
5	石川古墳群	古墳後期
6	猫山遺跡	旧石器、縄文早期
7	吹上遺跡	旧石器、縄文早～中期、弥生後期、古墳、近世
8	小坂上遺跡	縄文中期、弥生後期、古墳
9	前田遺跡	弥生後期、古墳
10	道ノ下遺跡	縄文中期、弥生後期、古墳
11	愈川遺跡	縄文中～晩期、弥生前～後期、古墳前～後期
12	土橋遺跡	縄文後期、弥生後期
13	川上遺跡	弥生後期
14	川上古墳群	古墳後期
15	井出丸山古墳	古墳後期
16	丸山橋上遺跡	縄文
17	藤ボサ遺跡ａ区	旧石器、縄文早・前期、古墳以降（円形土坑他）
18	藤ボサ遺跡ｂ区	旧石器、縄文草創～中期、古墳、奈良
19	ヌタバ遺跡	旧石器、縄文前期
20	茗荷沢遺跡	旧石器、縄文草創～中期
21	銭神遺跡	旧石器、縄文草創～中期、弥生？、弥生以降（円形土坑他）
22	銭神第Ⅱ遺跡	
23	銭神南遺跡	
24	段崎遺跡	縄文、古墳
25	閑峰遺跡	縄文早期、弥生後期
26	堀込遺跡	古墳
27	段崎古墳群	古墳後期
28	段崎古墳群	古墳後期
29	二ツ塚古墳	古墳後期
30	焼畑遺跡	縄文早期
31	井出３号墳（焼畑古墳）	古墳後期
32	松木遺跡	弥生後期
33	神田遺跡	縄文中・後期、弥生中・後期、古墳中・後期
34	阿野氏館	中世～戦国
35	馬場地下式横穴群	古墳？
36	北畑遺跡	弥生後期
37	雌鹿塚遺跡	縄文中～晩期、弥生中・後期
38	興国寺城跡	縄文中期、弥生中・後期、古墳前・後期、奈良、中世～近世
39	中アラク遺跡	古墳
40	根古屋丸尾遺跡	縄文中期、弥生後期
41	魔王第六天古墳	古墳
42	魔王第六天古墳	古墳
43	古城遺跡	縄文、弥生中・後期、古墳
44	下岡遺跡	古墳
45	光厳寺沢遺跡	縄文早期
46	的場古墳群	古墳後期
47	的場古墳	古墳後期
48	的場古墳	古墳後期
49	丸尾古墳群	古墳
50	丸尾古墳群	古墳
51	丸尾古墳群	古墳
52	青野仲山遺跡	古墳
53	的場遺跡	旧石器、縄文草創～中期、古墳後期、平安
54	秋葉林遺跡	旧石器、縄文草創～後期、弥生後期、古墳前・後期、奈良、律令期以降（円形土坑他）
55	鎌ヶ沢遺跡（鎌沢遺跡）	旧石器、縄文草創～後期
56	稲荷塚古墳	古墳
57	元野古墳群（クナイ塚古墳群）	古墳
58	元野古墳群（クナイ塚古墳群）	古墳
59	元野古墳群（クナイ塚古墳群）	古墳
60	元野古墳群（クナイ塚古墳群）	古墳
61	赤野遺跡	弥生後期
62	青野中荒工遺跡	古墳
63	井戸川西遺跡	旧石器、縄文
64	井戸川遺跡	縄文、弥生
65	元野馬牧土手遺跡	近世
66	元野馬牧土手遺跡	近世
67	元野馬牧土手遺跡	近世
68	元野遺跡	旧石器、縄文草創・早・中期
69	伊良宇祢遺跡	旧石器
70	伊良宇祢遺跡	旧石器
71	角右衛門アラク遺跡	縄文早・前期
72	大芝原遺跡	縄文中～後期、弥生、古墳
73	ヒラウネ古墳	古墳後期
74	古宮古墳	古墳中期
75	大廓遺跡	旧石器、縄文中期、古墳前期
76	藤ヶ久保遺跡	縄文中期
77	トヤ坂遺跡	縄文中期
78	ヲカメ遺跡	弥生後期、古墳前・中期
79	鳥谷山ノ神（山神）古墳	古墳後期
80	鳥谷アラク遺跡	縄文草創・早・中・後期
81	東原古墳群	縄文早・前期、古墳後期
82	元野橘南遺跡	旧石器
83	芝荒遺跡	
84	芝荒２号墳（芝荒古墳）	古墳
85	元野１号墳	古墳
86	四ツ塚古墳群	古墳
87	四ツ塚古墳群	古墳
88	四ツ塚古墳群	古墳
89	四ツ塚古墳群	古墳
90	元野第Ⅲ遺跡	旧石器、縄文早・中期
91	元野第Ⅱ遺跡	縄文早期
92	土橋第Ⅱ遺跡	旧石器、縄文
93	イタドリＣ遺跡	旧石器、縄文早期
94	イタドリＢ遺跡	旧石器、縄文草創～前期
95	イタドリＡ遺跡	旧石器、縄文草創～前期、奈良
96	馬見塚古墳群	古墳
97	西大曲第Ⅱ遺跡	縄文早期
98	芝荒古墳	古墳
99	西大曲東遺跡	
100	西大曲東第Ⅱ遺跡	
101	洞林遺跡	旧石器
102	三角遺跡	旧石器
103	休場下遺跡	旧石器
104	休場南遺跡	旧石器
105	休場遺跡	旧石器、縄文前・後期、弥生、古墳？
106	西大曲遺跡	旧石器、縄文早・中期、弥生後期、古墳後期
107	石川の栗田氏屋敷跡	戦国
108	平沼の土橋	戦国～近世
109	井出氏屋敷跡	戦国
110	井出丸山遺跡	旧石器、縄文早期
111	吹上１号墳	古墳後期
112	吹上２号墳	古墳後期
113	根古屋古墳群	古墳後期
114	根古屋古墳群	古墳後期
115	根古屋古墳群	古墳後期
116	根古屋清水遺跡	旧石器、縄文早・中期、弥生後期、古墳前・後期、戦国


0
1:25,000
1km
新沼津カントリークラブ
愛鷹シックスハンドレッドクラブ
東海大学
柳沢
青野
井出
平沼
113～115

第２図　周辺遺跡分布図

て、本遺跡と同様に丘陵上に立地し、円形土坑や溝等が検出される遺跡と、中世～近世初期における城館関係の遺跡に分れる。前者の遺構は遺物が出土することがほとんど無いことから、構築時期に関しては検出面の時期以降とされ、報告書では必ずしも中世以降としているわけではない。

本遺跡周辺の城館の代表例は、言うまでもなく興国寺城跡である。国指定史跡であり、沼津市教育委員会による史跡整備関係等の調査が数次にわたって行われ、次第にその全容が明らかになりつつある。これらの館跡、屋敷跡は、根方街道（中世の東海道）に概ね沿って分布しており、中世～近世の在地土豪層のあり方を考える上で、重要な材料となると思われる。土塁等が残存しているものもあり、十分な保存策が講じられる必要があるだろう。

註

１．本節での周辺遺跡分布図（第２図）、周辺遺跡一覧表（第１表）は、「静岡県 GIS」内のレイヤー「静岡県埋蔵文化財包蔵地カード」をベースにして、『沼津市史　資料編　考古』（沼津市 2002）、『沼津市埋蔵文化財分布地図』（沼津市教育委員会 1987）、『静岡県文化財地名表Ⅰ』（静岡県教育委員会（以下県教委と略）1988）、『静岡県文化財地図Ⅰ』（県教委 1988）を利用して補った。また、各遺跡の発掘調査報告等を適宜参照した。

第２章　調査の概要

第１節　調査の方法と経過

（１）調査の方法

前章で述べたとおり、今回の調査は、未買収であった２本の旧農道が対象である。南北農道を１区、東西農道を２区とした（第３・４図)。過去の調査成果から類推して、１区南半を除き比較的良好な残存状況であると想定された（註１)。

過去の調査により、今回の調査区の隣接部分の状況が判明しているため、以下のような手順で調査を進めることにした（１区・２区共通)。

①　表土等除去。重機で行う。攪乱等の除去も可能な限りこれに含める。

②　新期スコリア層（NSC）上面で、古墳時代以降の遺構を検出し調査する。過去の事例から、残存状況の良い箇所であっても、表土直下が新期スコリア層となっていると想定された。

③　新期スコリア層から富士黒土層（FB）上面まで人力掘削する。FB 上面で遺構検出と遺構調査を行う。ここで空中写真撮影にて、地形測量を行う。ここまでを第１面とする。

④　富士黒土層から漸移層(ZN)までを人力掘削する。休場層上面を遺構検出面とし､遺構調査を行う。空中写真撮影を行い、地形測量を行う。ここまでを第２面とする。

⑤　休場層を人力掘削する。休場層直下黒色帯（BB O）の上面まで掘削し、遺構確認面とする。空中写真撮影を行い、地形測量を行う。ここまでを第３面とする。調査区全面の掘削はこの面で終了

第３図　過去の調査区配置図

する。

⑥　調査区全体に４×４ｍのテストピット（TP）を 12 箇所設定し、人力掘削を行う（第５図）。途中、遺物・遺構が検出された場合は、TP を拡張して、その広がりを確認する。陥穴状の土坑の有無を確認するため、第Ⅲスコリア層上面で遺構確認を行う。TP 底面は水平を保ち、TP の掘り始めからの最大掘削深度２ｍまで掘削する。

⑦　TP 内中央に２×２ｍの下段調査区を設定し、人力掘削する。最大掘削深度２ｍまで掘削するが、中部ローム層中のペアスコリアが確認できたところで TP の調査を終了する。

遺物については、自然礫にいたるまで、出土位置を点取りしながら取り上げた。攪乱土中の遺物についても出土グリッド位置を記載して取り上げた。また、集石及び礫群の構成礫も他の遺物と一続きの通し番号を付けた。遺構図面の作成は、株式会社シン技術コンサルに委託して、空中写真による写真測量を主にして実施した。遺構等の写真撮影は、６×７判中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。また、35 ㎜カメラとデジタルカメラを補助的に使用した。

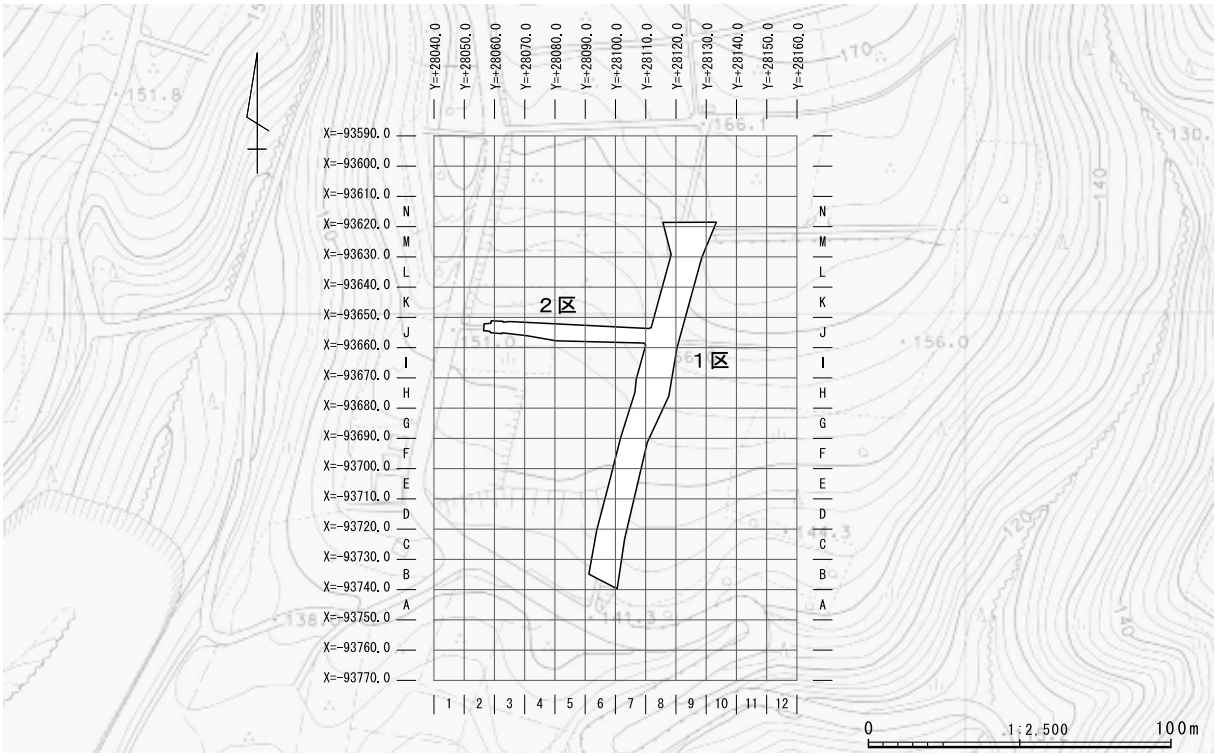
（２）現地調査の経過

調査に先だって、調査区とその周辺地域の草刈、小木の伐採を行った。草刈り等終了後の平成 27 年 10 月 19 日より、重機による表土除去作業を開始した。１区の南端部から開始したが、１区は特に南側を中心として残りが悪く、多くの箇所で第Ⅰスコリア層以下まで削平されていた。

１区と併行して２区の表土除去を行ったが、こちらの残存状況は良好で、大半の箇所でコンクリート直下に新期スコリア層が残存していた。

なお、農道下で地盤改良のため埋土は全て除去した。このため、表土等の掘削土量及び作業日数は、当初設計よりかなり増加している。

11 月 10 日より作業員を投入して、人力掘削作業を開始した。２区の第１面（新期スコリア層残存部分上面）の遺構確認を行い、円形土坑３基を検出、調査した。終了後、新期スコリア層以下の包含層掘削を行った。１区については、全体を通して FB 層の残りが極めて悪く、第１面の調査から除外した。



第４図　調査区配置図

そこで２区の調査と平行してFB層の掘削を行った。２区はFB層上面までの掘削を行い、12月21日に空中写真撮影及び航空測量を行い、第１面の調査を終了した。

引き続きFB層以下の第２面の包含層を掘削した。YL層上面までに、２区で集石遺構と土坑を検出し、それぞれ遺構調査を行った。１区は僅かに残存したFB層中から極めて少ない遺物が出土したのみで、遺構はなかった。YL層上面までの第２面は平成28年１月12日に空中写真撮影ならびに航空測量を行い終了した。

続く第３面（YL層）の調査においては、２区で３基の礫群を検出し調査した。２区からは礫群以外にも、遺物と礫が散在して出土したが、ブロック状の集中部を見出すことはできなかった。２月10日に空中写真撮影ならびに航空測量を行い、BB０層上面までの第３面の調査を終了した。なお、１区は残存していたYL層を全て人力掘削したが、遺物の出土は無かった。２区谷部においては、土層の判別を誤ったため、本来、BB０層上面での地形測量を、谷部のみは休場層下層（YLL）上面で計測してしまった。そこで、今回の報告書では谷部のみ等高線を入れず、遺構全体図を作成している（第３章)。航空測量終了後にYLLの掘削を完了させ、第３面の調査を終了した。

BB０層上面までで、調査区全体にわたる包含層掘削は終了し、２月10日より調査区全面に設定した12箇所のテストピット（上段４ｍ四方、下段２ｍ四方）の掘削を行った。途中TP５より黒耀石製の剥片が第Ⅳ黒色帯の最上部より検出されたため、TP５を拡張し、遺物の広がりを追求したが、他の遺物は検出されなかった。また、前述のとおり、第Ⅲスコリア層の上面で陥穴状の土坑の検出に努めたが、全てのTPで検出されなかった。TP全体で、遺物（礫含む）は上述のTP５出土の剥片のみであり、他のTPからは全く検出されなかった。３月11日にTPの全景写真を撮影し、平成27年度の渕ヶ沢遺跡の現地調査を全て終了した。途中２月12日に、都留文科大学名誉教授上杉陽先生に現地に来訪して頂き、主にニセローム層（NL）以上の上部層の火山灰についての現地指導を受けた。

掘削土量の計測、コンテナハウス等の撤去作業を行い、３月17日、現地から撤収した。

（３）資料調査（整理作業・報告書作成）

平成28年７月から11月にかけて、資料整理作業を実施した。遺構・遺物の図化作業等を株式会社パソナに委託し、整理・報告書作成作業を行った。遺構図面は、現地測量業務委託の納品物である、株式会社シン技術コンサルの写真測量のデータを原図として用いた。遺構図・遺物図の編集、版組、トレースはAdobe Illustrator CS ３により行った。

８月２日に遺物写真撮影を実施した。中判カメラを使用し、カラーリバーサルとモノクロネガのフィルム写真を撮影した。

黒耀石の産地分析を行うため、６点の試料を抽出し、株式会社パレオ・ラボに分析を委託した（付編参照)。

11月30日をもって、報告書作成にかかる作業を終了した。

第２節　土層

今回の渕ヶ沢遺跡の調査では、愛鷹山南麓の標準土層の堆積が確認できたが、２区の谷底部は各層が厚いため、現地での土層注記を基に記述する。なお、分層及び比定等について、都留文科大学名誉教授上杉陽氏、沼津市教育委員会前嶋秀張氏に教示を賜った部分があることを付記しておきたい。

以下のとおり、基準土層を設定した（第６～９図）（図版２・６・７)。なお、第６図の柱状図は、２区土層図（第７図)、テストピット２（TP ２）の土層図（第８図）を合成して作成した。TP ２において

は深度の関係から、下記の第 30 層（中部ローム４）までしか掘削できなかったため、図には第 31 層以下が記載されてはいない。第 31 層以下については、TP ２以外のテストピットを参照のこと。

第１層：新期スコリアを含む層である（NSC)。２区においては大半の部分で認められた。２区では、この層の上に砕石を敷き、コンクリート路盤が設置されていた。この層中から、第 18 図５の条痕文土器が出土した。

第２層：カワゴ平パミスを含む層である（KGP)。

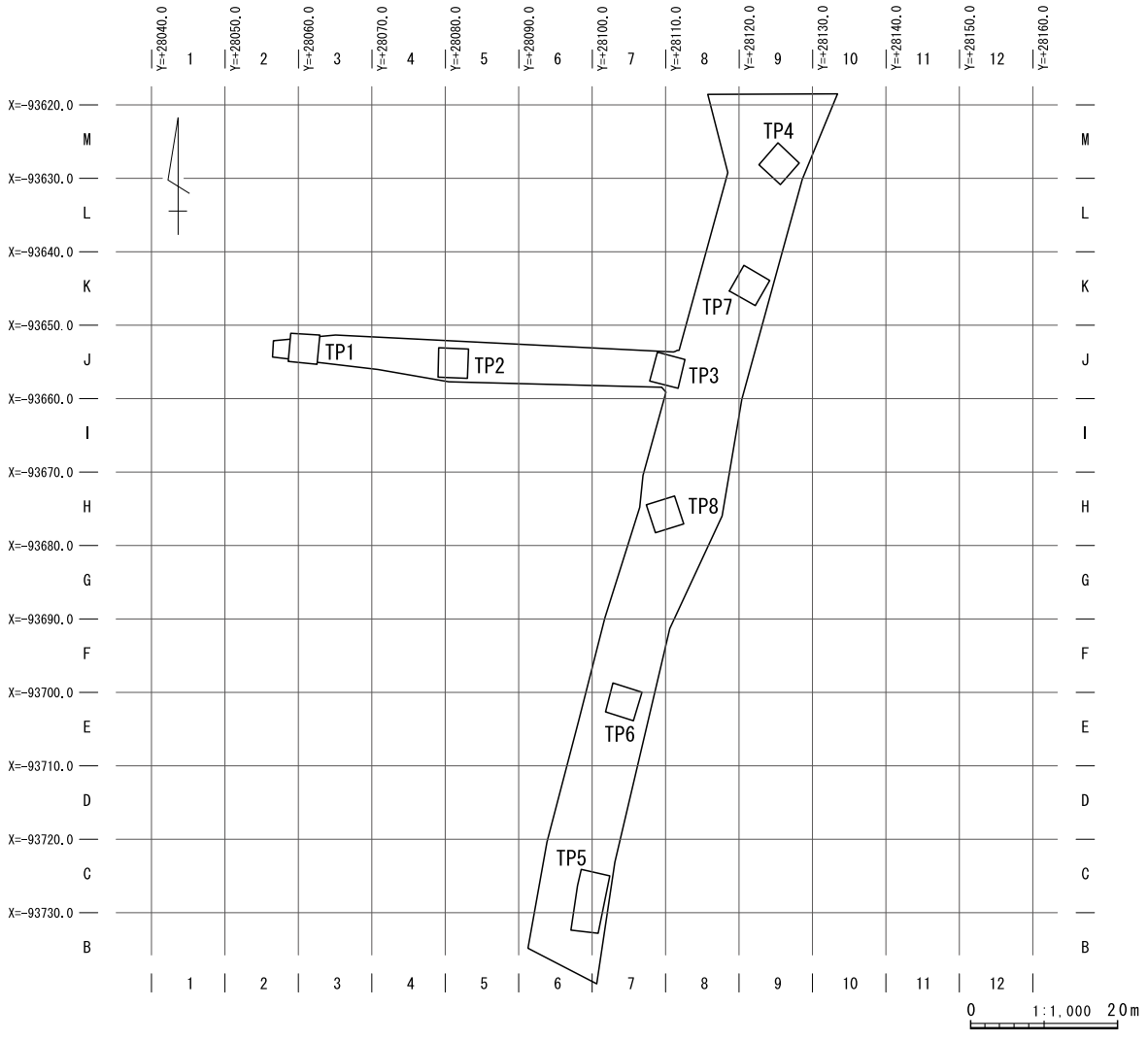
第３層：愛鷹基本層序の暗褐色土層に相当する（AN)。本遺跡の過去の報告（県埋文センター 2013）で記載のある、KGP ～ AN 間の黒色土（KURO）と黄褐色土（OKS）は、今回の調査では、２区の谷底部においても認識できなかった。相当部分は、上下の KGP 及び AN 層に含まれていると考えられる。

第４層：にぶい黄褐色土層である。栗色土層（KU）に相当する。層厚の厚い箇所ほど黄褐色の発色は良好である傾向が見られる。

第５層：富士黒土層（FB）に相当する。第４層との境界は比較的明瞭であるが、次の第６層との境界は漸移的であり、かならずしも明瞭ではない。

第６層：漸移層（ZN）である。にぶい黄褐色（10YR 5/3）を呈する部分がある。赤色スコリアを含む。

第７層：休場層上層（YLU）である。にぶい黄褐色（10YR 4/3）を呈す。第６層との境界は比較的明



第５図　テストピット配置図

瞭である。赤色及び黒色スコリアを含む。締まり、粘性ともややあり。この層と次の第８層との間のスコリア層（YLs １）は確認できなかった。

第８層：休場層中層（YLM）である。灰黄褐色（10YR 4/2）を呈す。赤色スコリアを含む。黒色スコリアを少量含む。締まり、粘性ともにあり。この層と次の第９層との間に、谷底部を中心に、暗赤褐色スコリアの薄層（YLs ２）が広範に認められた。

第９層：休場層下層（YLL）である。褐灰色（10YR 4/1）を呈す。赤色、黒色スコリアを多く含む。締まり、粘性ともにあり。

第 10 層：休場層直下黒色帯（BB O）である。黒褐色（10YR 3/2）を呈す。締まり、粘性ともにややあり。谷部においては比較的明瞭に識別できるが、尾根部では次の SC Ⅰ層と混在し、識別できない箇所が多い。

第 11 層：第Ⅰスコリア層（SC Ⅰ）である。にぶい黄褐色（10YR 4/3）を呈す。赤色、黒色スコリアを多量に含む。スコリアが凝集している部分が散在する。

第 12 層：第Ⅰ黒色帯（BB Ⅰ）である。黒褐色（10YR 3/1）を呈す。赤色、黒色スコリアを多量に含む。スコリアが強く凝集している部分が散在する。

第 13 層：ニセローム層（NL）である。にぶい黄褐色（10YR 5/4）を呈す。AT テフラのパッチを含む。締まり強い。粘性ややあり。

第 14 層：第Ⅱ黒色帯（BB Ⅱ）である。褐灰色（10YR 4/1）を呈す。細かい赤色スコリアを含む。締まり、粘性ともにあり。

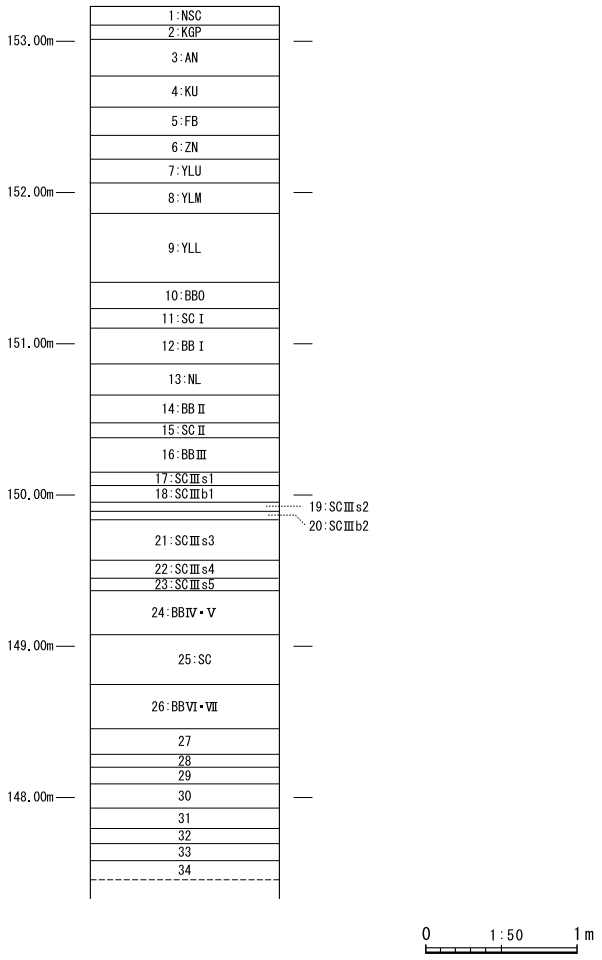
第 15 層：第Ⅱスコリア層（SC Ⅱ）である。褐色（7.5YR 4/3）を呈す。赤色スコリアを多量に含む。締まり、粘性ともにあり。

第 16 層：第Ⅲ黒色帯（BB Ⅲ）である。黒褐色（10YR 3/1）を呈す。赤色スコリアを含む。締まり、粘性強い。

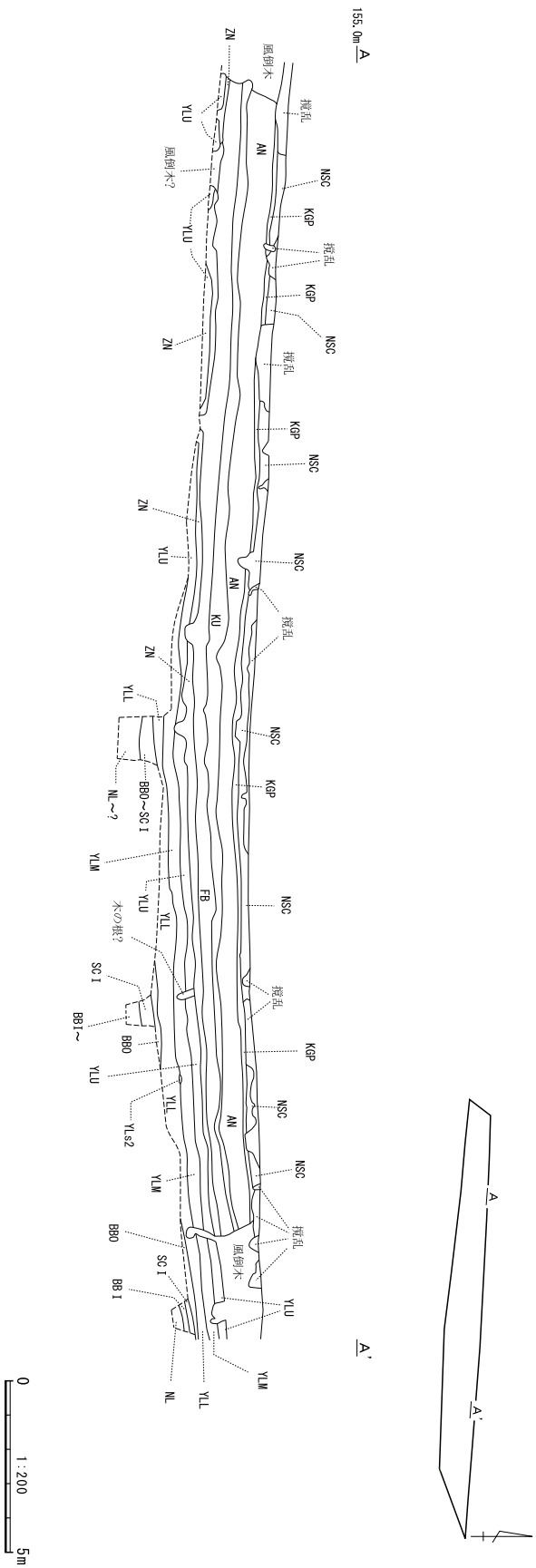
第 17 層：第Ⅲスコリア帯スコリア１（SC Ⅲs１）である。灰褐色（7.5YR 5/2）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを含む。締まり強い。粘性あり。

第 18 層：第Ⅲスコリア帯黒色帯１（SC Ⅲb １）である。褐灰色（7.5YR 4/1）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを含む。締まり強い。粘性あり。

第 19 層：第Ⅲスコリア帯スコリア２（SC Ⅲs ２）である。灰黄褐色（7.5YR 5/2）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。締まり強い。粘性あり。



第６図　土層柱状図



第７図　２区土層図

第 20 層：第Ⅲスコリア帯黒色帯２（SC Ⅲｂ２）である。灰黄褐色（10YR 4/2）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。締まり強い。粘性あり。

第 21 層：第Ⅲスコリア帯スコリア３（SC Ⅲｓ３）である。灰褐色（５YR 5/2）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。粒径５㎜大の黒色スコリアが目立つ。硬く締まり、粘性弱い。

第 22 層：第Ⅲスコリア帯スコリア４（SC Ⅲｓ４）である。にぶい黄褐色（10YR 4/1）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。硬く締まり、粘性弱い。

第 23 層：第Ⅲスコリア帯スコリア５（SC Ⅲｓ５）である。褐灰色（10YR 4/1）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。硬く締まり、粘性弱い。

第 24 層：第Ⅳ、第Ⅴ黒色帯に相当する層である。スコリア層により本来は分離されるが、スコリア層を確認できなかったため、同一層とした。黒色（7.5YR 2/1）を呈す。粒径５㎜～１㎝大の黒色スコリアが目立つ。硬く締まり、粘性弱い。なお、今回の旧石器時代層下部調査のテストピット５（TP ５）で出土した黒耀石の剥片（図版８－３－16）は、この層の最上部より出土したため、第Ⅳ黒色帯のものと判断した。

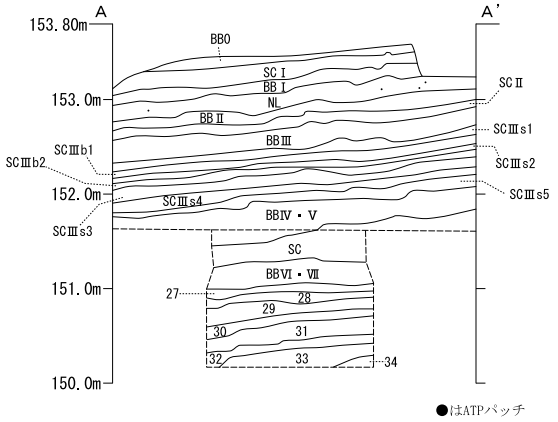
第 25 層：スコリア層（SC）である。上部にはスコリアが凝集している部分がある。中間は赤色スコリアが多量にあり、下部は漸移的に下層に続く。締まり、粘性ともにあり。

第 26 層：第Ⅵ、第Ⅶ黒色帯に相当する層である。本来はスコリア層により分離されるが、スコリア層を確認できなかったため、同一層とした。黒色（10YR 2/1）を呈す。赤色スコリア、黒色スコリアを多く含む。締まり、粘性ともにあり。

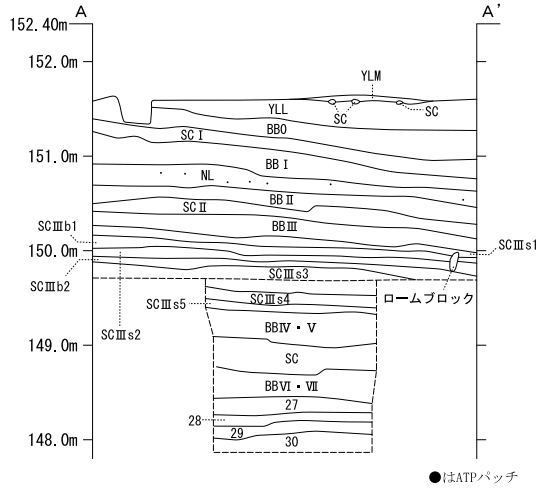
第 26 層下の第Ⅳスコリア層（SC Ⅳ）は、今回の調査区内では認識できなかった。27 層以下は中部ローム層である。

第 27 層：中部ローム１。灰褐色を呈す（7.5YR 5/2)。やや砂質で、締まり、粘性ともにあり。

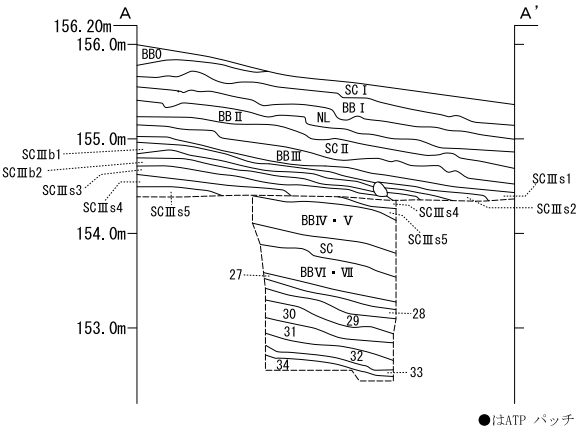
第 28 層：中部ローム２。にぶい褐色を呈す（7.5YR 5/4)。細かい赤色スコリアを含む。締まり弱い。



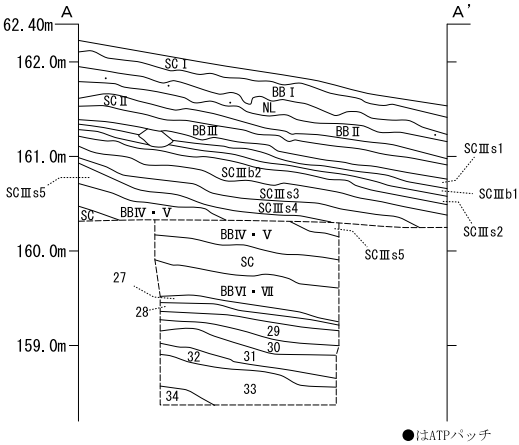
TP１西壁



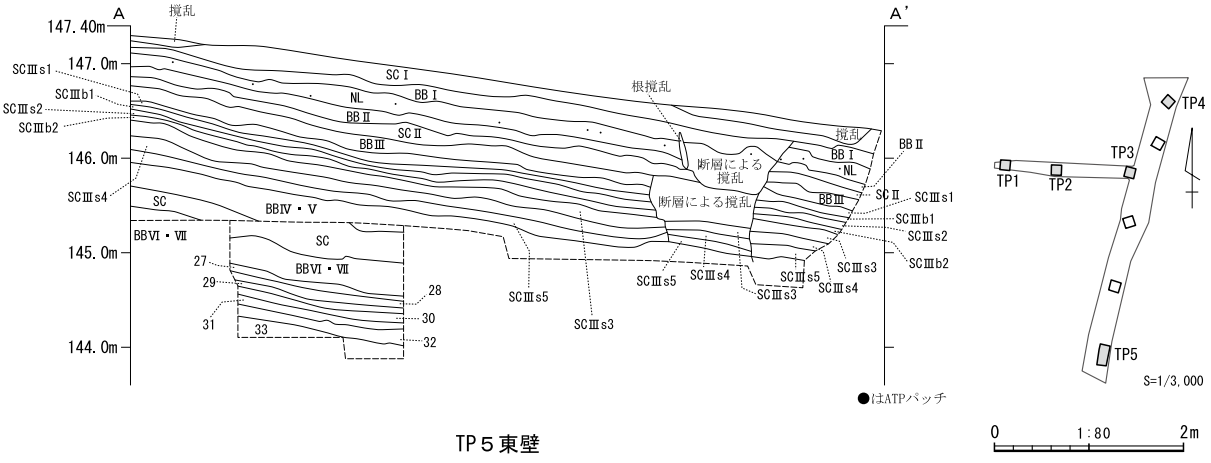
TP２北壁



TP３南壁

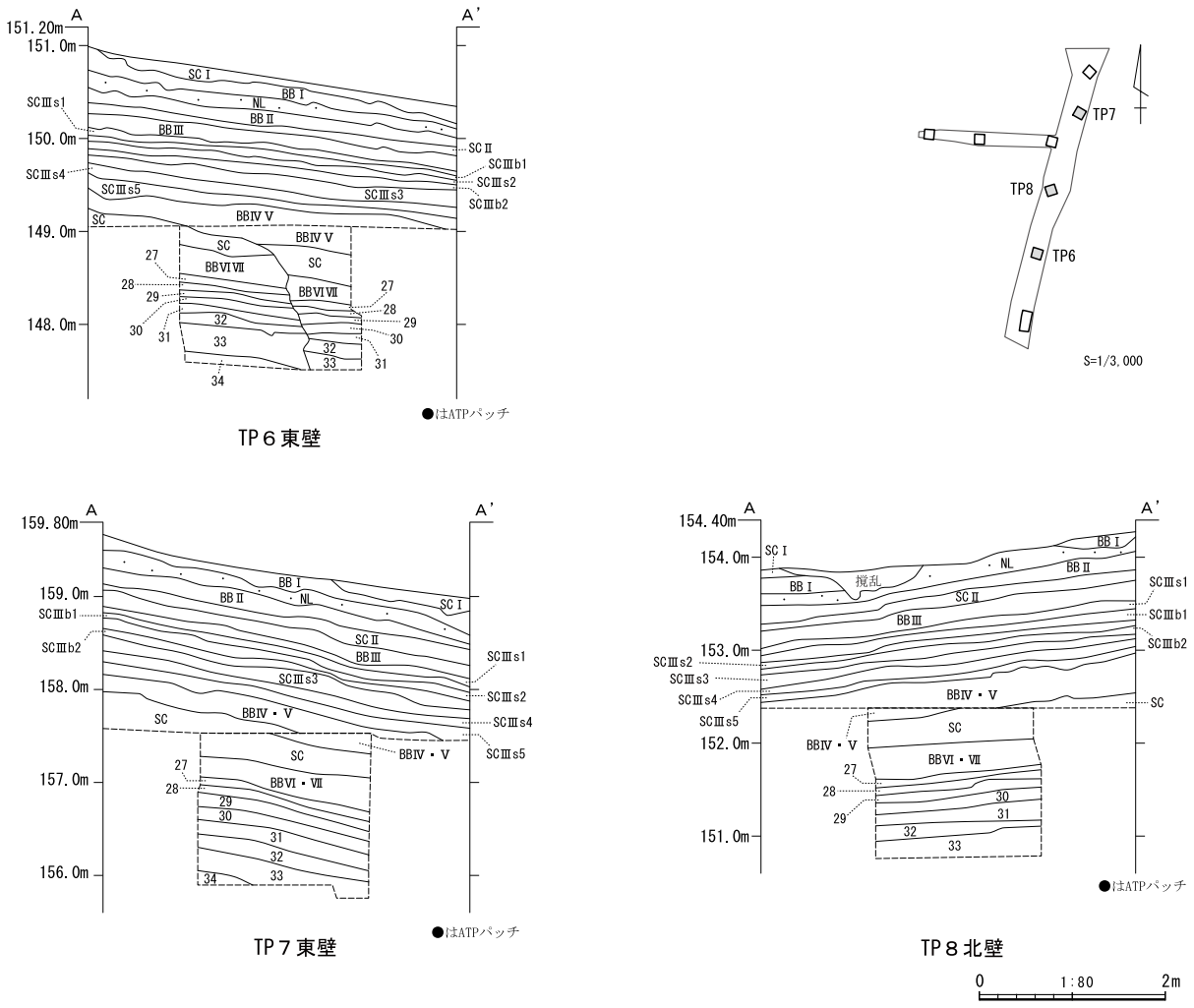


TP４南東壁



TP５東壁

第８図　テストピット土層図１



第９図　テストピット土層図２

粘性あり。

第 29 層：中部ローム３。暗灰黄色を呈す（2.5 Y　5/2)。赤褐色スコリアを少量含む。締まり、粘性ともにあり。

第 30 層：中部ローム４。にぶい黄色を呈す（10YR　5/3)。赤褐色スコリアを少量含む。締まり、粘性ともにあり。

第 31 層：中部ローム５。暗灰黄色を呈す（2.5 Y　5/2)。赤褐色スコリアを少量含む。締まり、粘性ともにあり。

第 32 層：中部ローム６。層全体は暗灰黄色（2.5 Y　5/2）を呈すが、硬いスコリア塊（にぶい赤褐色　5YR 4/3）を含む。硬く締まる。粘性弱い。ペアスコリアの上部に比定した。

第 33 層：中部ローム７。暗灰黄色（2.5 Y　5/2）を呈す。やや砂質。締まり、粘性ともにあり。

第 34 層：中部ローム８。暗灰黄色（2.5 Y　5/2）を呈す。赤褐色スコリアを多量に含む。締まり、粘性あり。ペアスコリアの下部に比定した。

註

１．報告書（県埋文センター 2013）から、第１面の残存状況は、１区では悪いと想定された。特に報告書の第 195 図から、１区の南半部では第１面は残存していない可能性が大であった。第２面（縄文面）及び休場層も、１区の南半では残存していない可能性があった（第 66 図及び 103 図）。２区は全ての調査面が残存していると予想された。

写真１　表土除去作業状況

写真２　テフラ等現地指導状況

写真３　テストピット下段の掘削作業状況

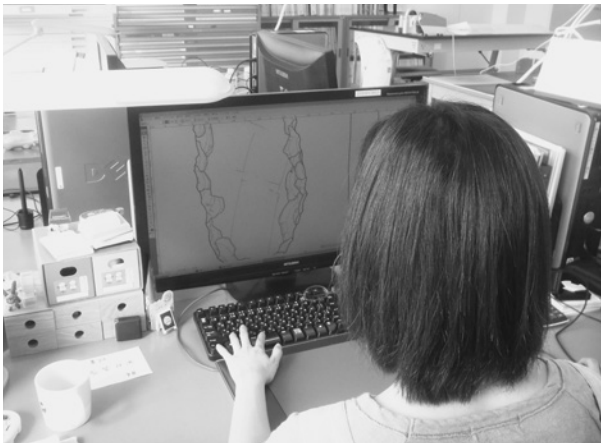


写真４　石器のデジタルトレース作業状況

第３章　調査の成果

第１節　遺構

今回の調査で検出された遺構は、第１面（中世以降）で円形土坑３基、第２面（縄文時代）で、土坑２基、集石１基、第３面（旧石器時代）で礫群３基である。いずれも２区での検出である。１区は遺構面の残りが悪く、そのためか遺構の検出はなかった。

遺構は、第１面においては表土直下で新期スコリア層（NSC）残存部の上面で検出されている。第２面では土坑は休場層上部層（YLU）の上面が検出面である（集石は別）。第１面のコンター面は富士黒土層（FB）上面であり、ここでも遺構検出を試みたが、遺構は検出できなかった。また、旧石器時代下部層調査のテストピットでは、旧石器時代の陥穴が検出される第Ⅲスコリア層上面で、全てのテストピットで遺構検出作業を行ったが、遺構は検出されなかった。

各遺構のデータについては、遺構一覧表（第２・４表）を参照していただきたい。また、過去に調査された礫群の礫との接合作業は、本報告作成過程では時間的な制約及び個々の礫群内での接合関係が極めて少なかったこともあり、実施していない。

各面ごとの遺構全体図を第10･12･14図に掲示した。それぞれ10cm間隔の等高線を入れてある(註１)。

１　第１面の遺構

（１）１号土坑（SK １）（第10・11図）（図版３－１）

２区Ｊ－５グリッドより検出された。いわゆる円形土坑であるが、残りが悪く、壁の残存部分は1/5以下であると想定される。

（２）２号土坑（SK ２）（第10・11図）（図版３－２）

２区Ｊ－４グリッドより検出された。いわゆる円形土坑であるが、残りが悪く、壁の残存部分は1/5～1/4程度であると想定される。

（３）３号土坑（SK ３）（第10・11図）（図版３－３・４）

SK ２と同様に２区Ｊ－４グリッドより検出された。SK ２の東南東約３ｍの位置にある(遺構中心間)。３基の円形土坑のうち壁が全周するものはこれだけである。長軸約100㎝、短軸約98㎝。

３基の土坑とも、過去に愛鷹山麓で検出されている円形土坑と同様の遺構である。覆土はすべて１層のみである。遺物の出土は無く、掘り込み面も不明なため、年代の特定はできないが、覆土の状況から同一時期のものと考えられる。

２　第２面の遺構

（１）４号土坑（SK ４）（第12・13図）（図版３－５）

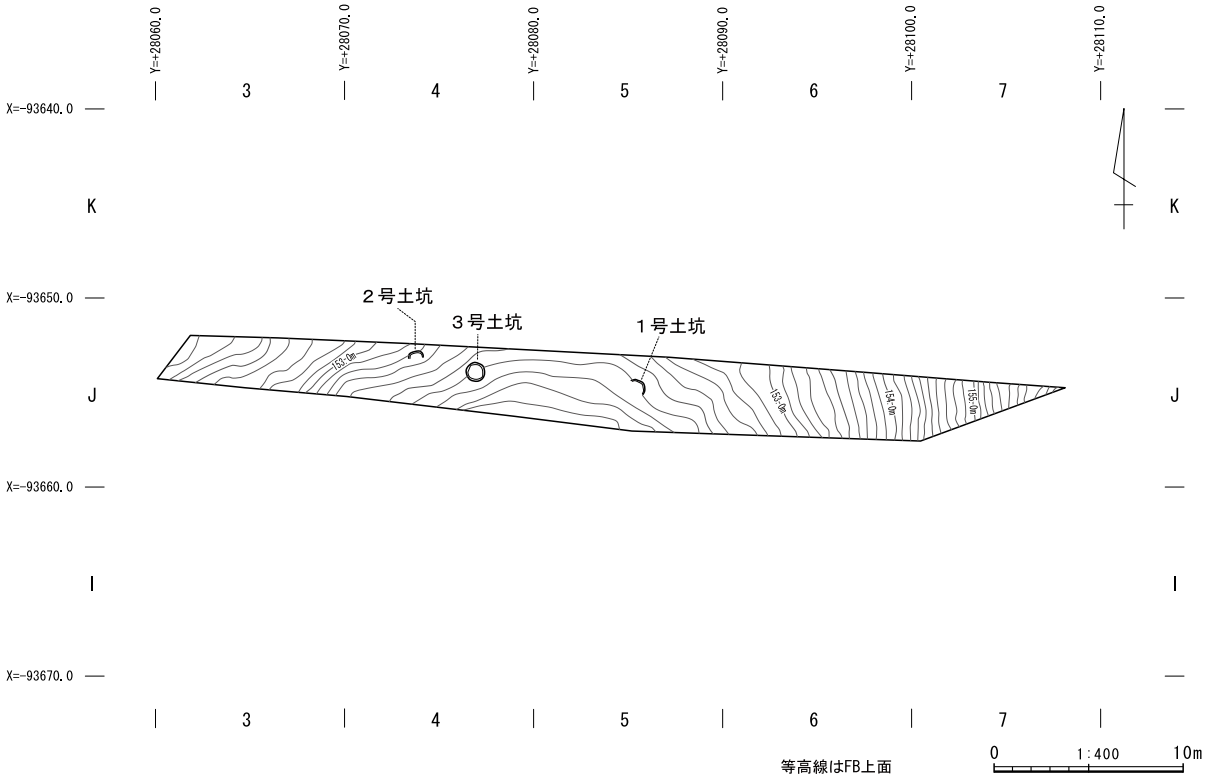
２区との境界に近いＪ－８グリッドより検出された。西側のコーナー部分が攪乱のため失われている。そのためやや不明確ではあるが、不整な隅丸長方形を呈すると思われる。壁の立ち上がりは緩やかであり、底部は平坦である。覆土は２層に分けられるが、FB層に類似した土が上部に入り込んでいる。検出面から遺構底部までの深さは最も深い所で約15㎝であり、当初の掘り込みはFB層中からなされていた可能性が高い。覆土から遺物は出土していない。

（２）５号土坑（SK ５）（第12・13図）（図版３－６）

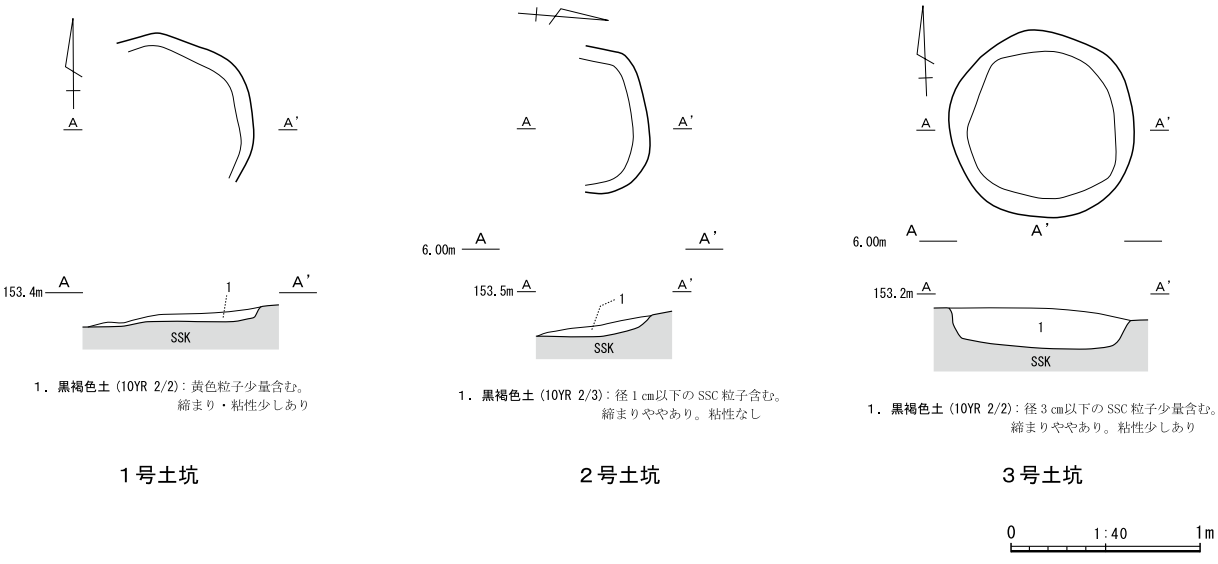
２区Ｊ－３グリッドより検出された。壁は緩やかに傾斜し、底部には平坦面がある。覆土は４層に分けられ、上部に灰黄褐色土があるが、全体としてFB層に類似する土である。最も覆土が残存している部分で、底面まで約37㎝の深さがある。この土坑はその形状等が、陥穴状の土坑の下部～底部に類似している。休場層以上の層中の掘り込みは確認できなかったが、FB層以上の層から掘り込まれた、陥穴状土坑の可能性が高い。遺物の出土はない。

（３）１号集石（SY １）（第12・13図）（図版３－７・８）

２区Ｊ－５グリッドより検出された。２区を南北に貫く埋没谷の中央部に位置する。FB層上面での



第10図　第１面遺構全体図



第11図　第１面遺構個別図

検出であるが、掘り込み等は確認できなかった。また、集石下部の漸移層（ZN）から炭化物が検出されたが、レベル差があるため、集石との関連は不明である。

本集石はわずか３点の構成礫からなる長軸が約 19 ㎝の極めて小規模な集石である。３点の礫はそれぞれ隣の礫と接しており、まとまった感じを強く受ける。

３　第３面の遺構

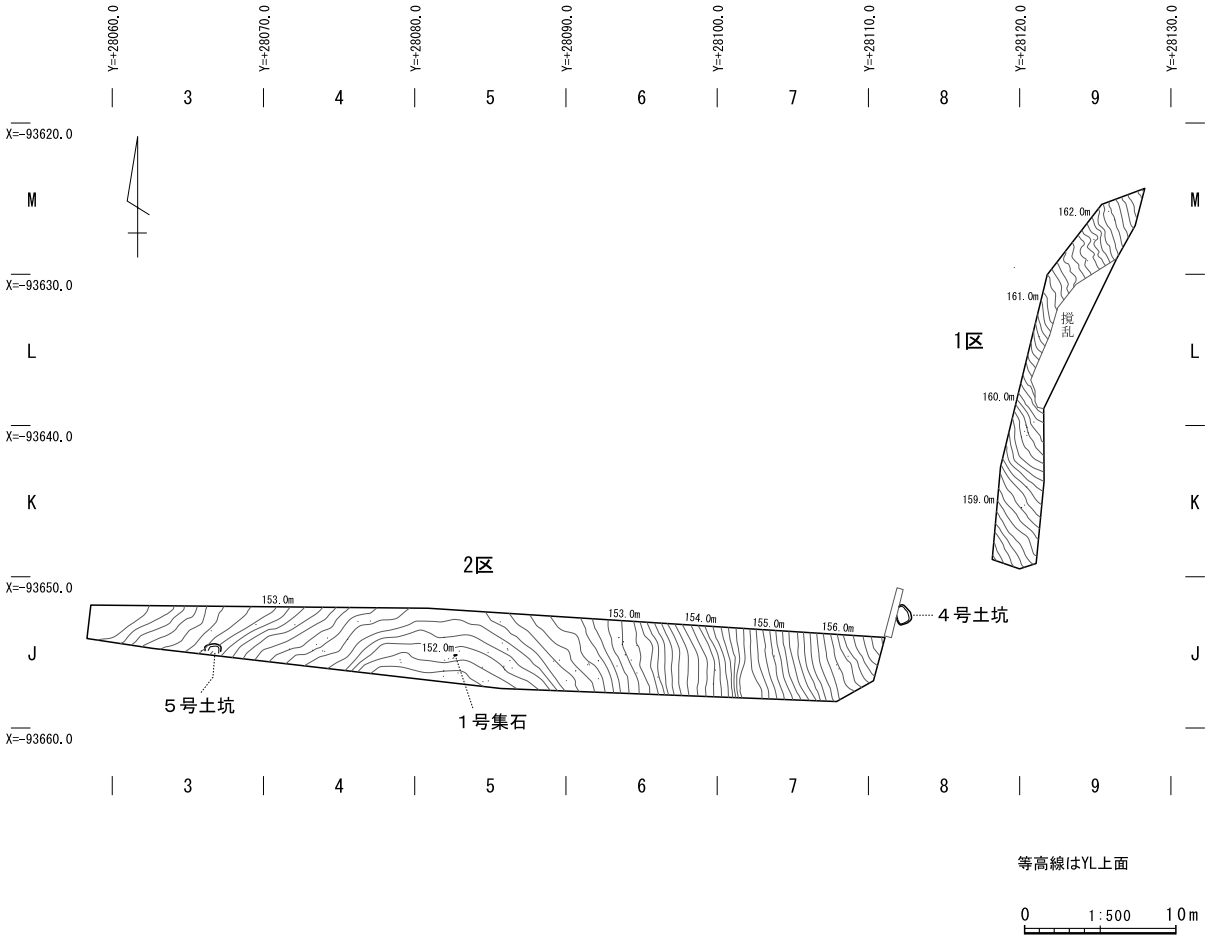
（１）１号礫群（RG １）（第 14・15 図）（図版４－１・２）

２区Ｊ－４・５グリッドより検出された。ただし、構成礫の大多数はＪ－４グリッド側に分布する。礫の分布範囲は３基中最も広く、長軸約２ｍ38 ㎝、短軸約１ｍ78 ㎝である。25 点の礫と１点の石器 95（尖頭器）（第 20 図 14）から構成される。全体としては南北方向に細長い分布範囲を示しているが、東側の礫 80 がやや全体から離れている。垂直分布を見ると南側ほどレベルが徐々に下がってゆくが、土層の傾斜とほぼ一致しており、傾斜した谷部の地形に沿った垂直分布といえるであろう。接合関係は２組確認できた。礫は散在して分布しており、分散型（保坂 2012）である。

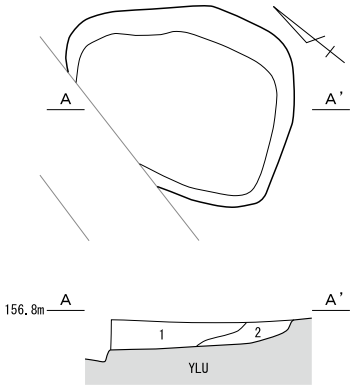
この礫群は休場層中層（YLM）のものと考えられる。なお、尖頭器については、次節で記述する。

（２）２号礫群（RG ２）（第 14・16 図）（図版４－３）

２区Ｊ－５グリッドより検出された。５点の礫から構成される、極めて小規模な礫群である。礫の分布範囲は、長軸約 26 ㎝、短軸約 16 ㎝と非常に小さい。５点の礫が密集しながら東西方向に並んでいる。垂直分布を見ると明らかに西側に傾斜しているが、礫群より下部の土層堆積状況を見る限り、西に向かっ

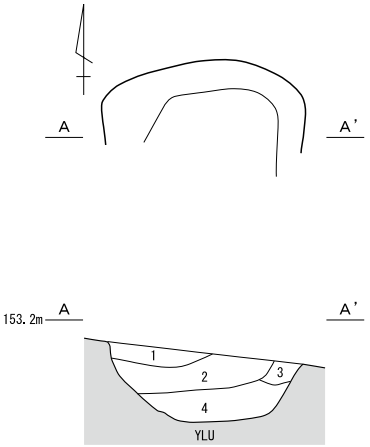


第 12 図　第２面遺構全体図



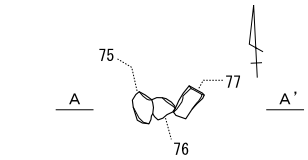
１．暗褐色土（10YR 3/4）：径２㎜程度の暗茶褐色スコリアわずかに含む。
締まり・粘性ややあり。FB に類似する
２．にぶい黄褐色土（10YR 4/3）:YL 層のブロックやや多く含む。炭化物少量含む。
締まりあり。粘性ややあり

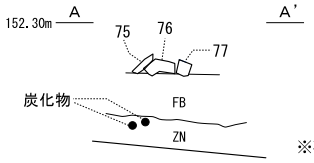
４号土坑



１．灰黄褐色土（10YR 4/2）：細かいスコリア含む。締まり・粘性ややあり
２．黒褐色土（10YR 3/2）：赤色スコリア含む。炭化物少量含む。締まり・粘性あり
３．黒褐色土（10YR 2/2）：細かい赤色スコリア含む。締まり・粘性あり
４．にぶい黄褐色土（10YR 4/3）：ロームブロック含む。炭化物少量含む。
締まりあり。粘性強い

５号土坑





※礫に付した数字は遺物番号

１号集石

土坑
0　1:40　1m

集石
0　1:20　50cm

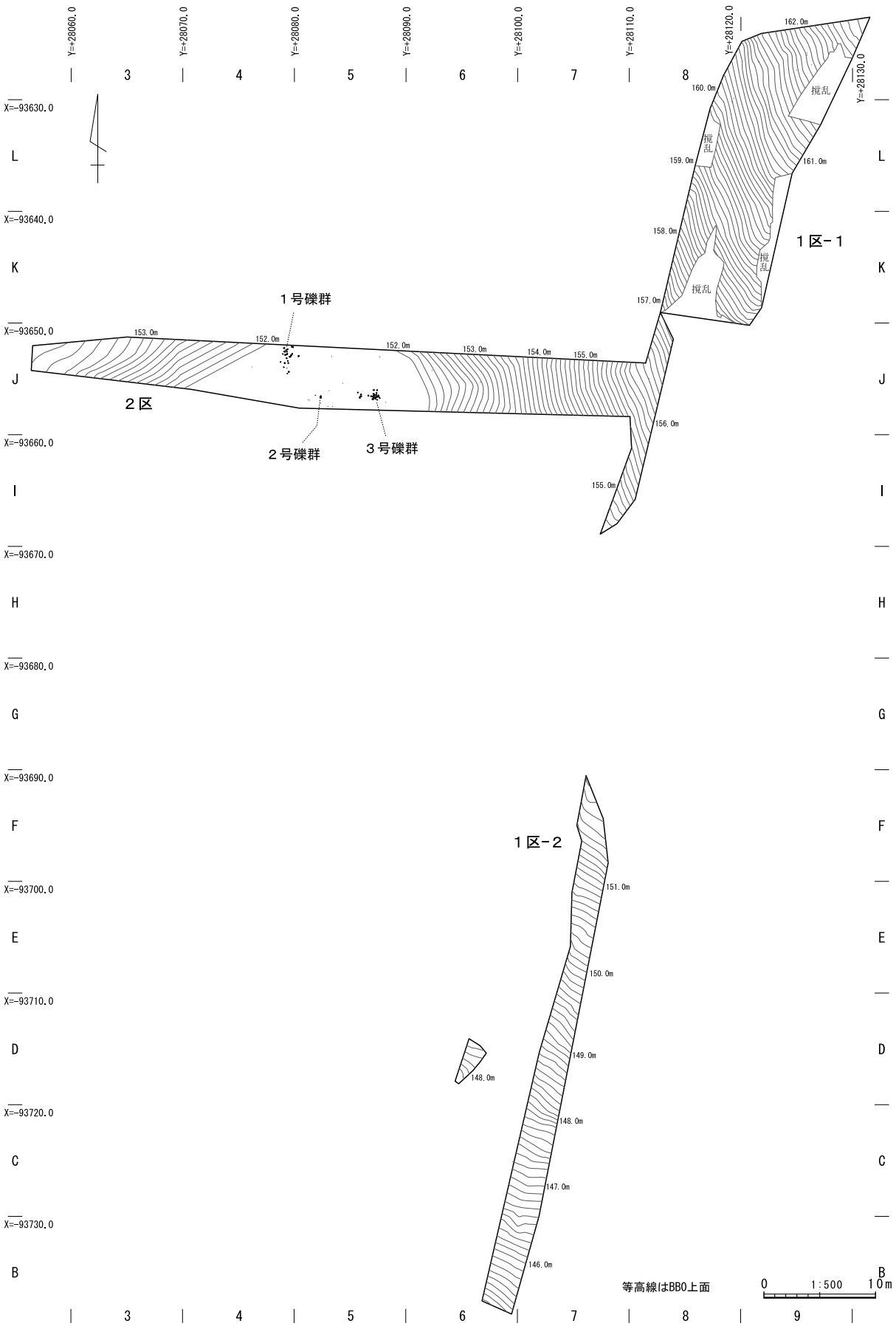
第 13 図　第２面遺構個別図

第２表　第２面遺構一覧表

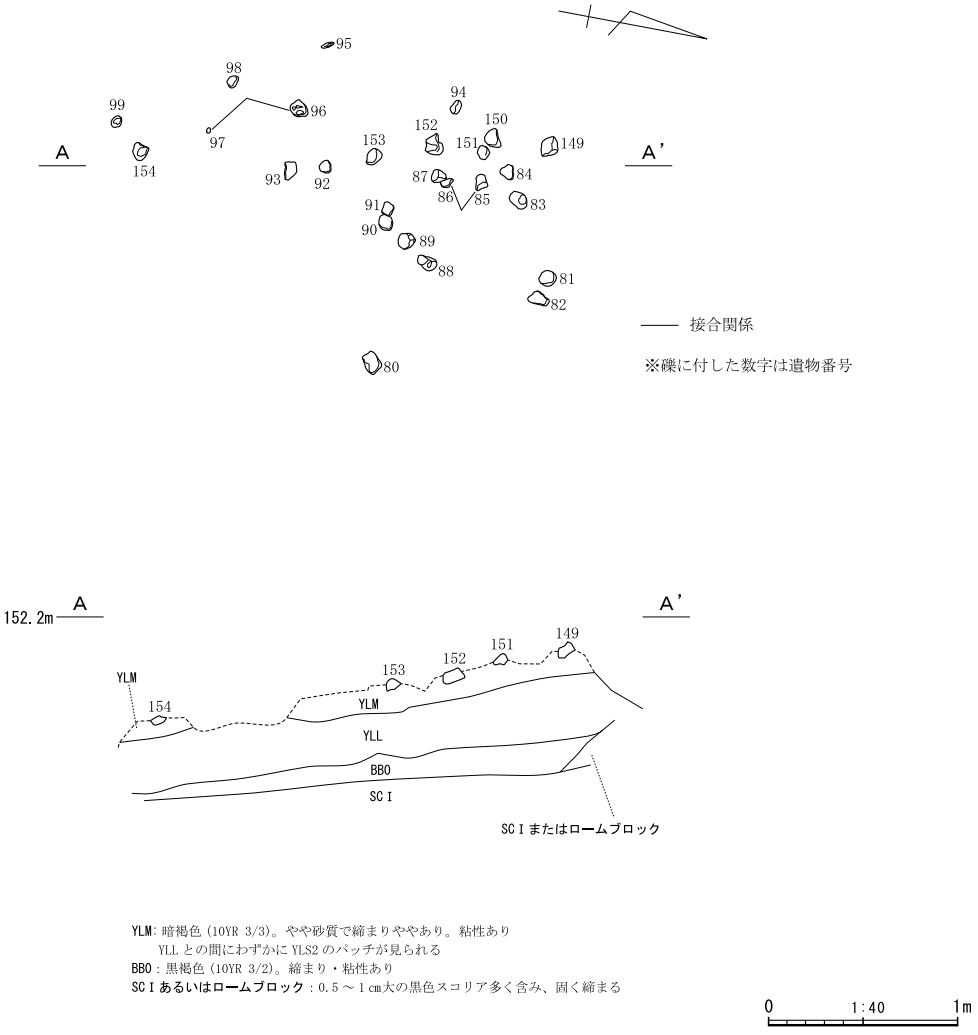
遺構名	区	グリッド	長径（ｍ）	短径（ｍ）	礫個数	赤化率（%）	備考
4 号土坑	2	J-8	1.27	1.00	－	－	主軸方向 :N-42° -W
5 号土坑	2	J-3	1.09	0.62	－	－	主軸方向 :N-90°
1 号集石	2	J-5	－	－	3	0	礫散布範囲 0.19 × 0.10 m

第３表　１号集石礫計測表

取り上げ番号	区	遺構	層位 CD	グリッド	重さ（g）	接合番号	備考
75	2	1 号集石	FB	J-005	157.0		
76	2	1 号集石	FB	J-005	177.3		
77	2	1 号集石	FB	J-005	200.9		



第 14 図　第３面遺構全体図



第 15 図　１号礫群実測図

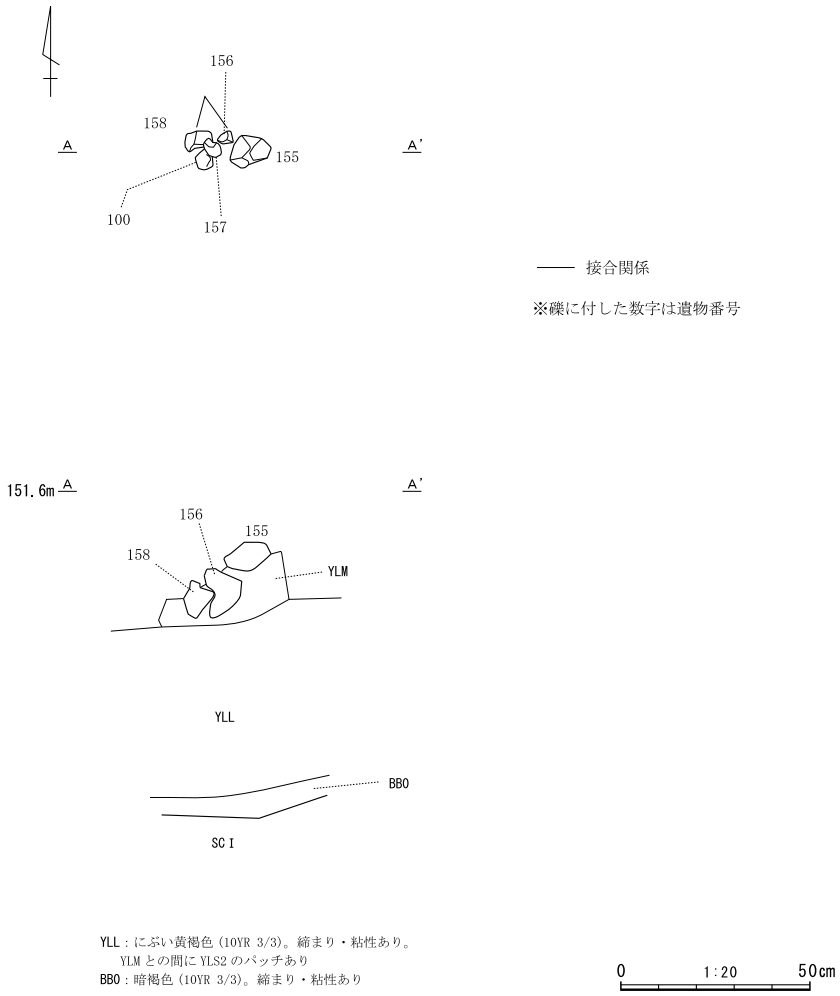
第４表　第３面遺構一覧表

遺構名	区	グリッド	礫個数	赤化率（%）	備考
1 号礫群	2	J-4・5	26	42	礫散布範囲：2.38 × 1.78 m
2 号礫群	2	J-5	5	20	礫散布範囲：0.26 × 0.16 m
3 号礫群	2	J-5	29	45	礫散布範囲：2.12 × 1.13 m

てわずかに傾斜しているものの、礫群の傾きとは齟齬がある。礫群の西方向の傾斜は当時の地表面の凹凸と関連したものであろう。接合関係は１組確認できたが､隣り合った礫である（156･158)。密集型（保坂 2012）であるが、大規模な密集型の礫群とは相当な懸隔がある。

休場層中の下部のスコリア層（YLs ２）直上での検出であるため、休場層中層（YLM）のものと考えるのが妥当であろう。

なお、先述した RG １は、構成礫の出土レベルが RG ２と異なっており、YLs ２との間に「間層」が認められる。RG ２の場合は最もレベルの低い礫が、YLs ２にほぼ密着しており、礫群同士に時間差が存在



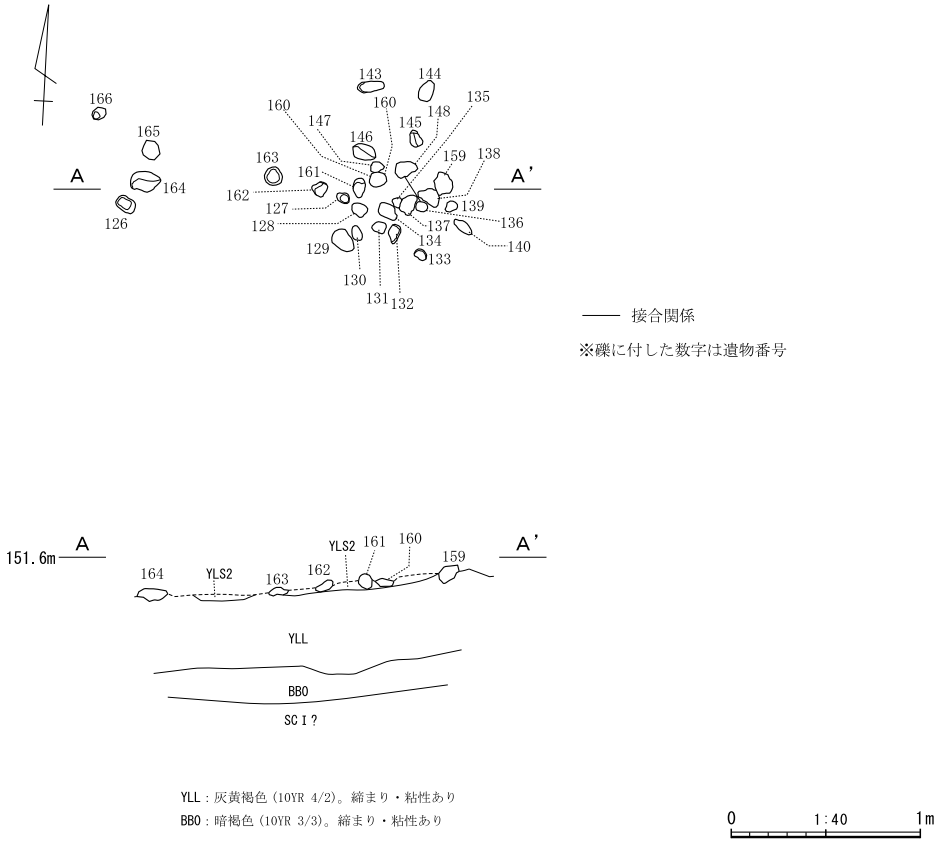
第 16 図　２号礫群実測図

すると思われる。

（３）３号礫群（RG ３）（第 14・17 図）（図版５－１）

２区Ｊ－５グリッドより検出された。２箇所の礫のまとまりがあり、最も離れた箇所(163 と 164 の間)の間隔が約 64 ㎝あるが、この礫群の外には集中して分布する礫が存在しないため、１基の礫群として扱った。西側のまとまり（126、164 ～ 166）は４個の礫、東側は 25 個の礫から構成される。東側は長軸約１ｍ 13 ㎝、短軸約１ｍである。礫の空白部分を含むが、全体としては、長軸約２ｍ 12 ㎝、短軸約１ｍとなる。垂直分布を見ると西側に向かってレベルが極めて緩やかに下がってゆくが、土層の傾斜とほぼ一致しており、傾斜した谷部の地形に沿った垂直分布といえる。接合関係は１組確認できた（136・148)。東側西側ともに礫は集中して分布しており、個々については集中型（保坂 2012）であろう。

この礫群の礫はスコリア層中（YLs ２）に含まれ、一部はスコリア層下の休場層下位層（YLL）に食い込んでいることから、YLL 最上部～ YLs ２の時期と考えるのが妥当であろう。土層断面の観察から見れば、今回調査した３基の礫群のうち、最も古いと考えられる。



第 17 図　３号礫群実測図

第５表　礫群礫計測表

遺物番号	区	遺構	層位	グリッド	重さ（g）	接合番号	備考
80	2	1 号礫群	YLM	J-005	328.2		被熱
81	2	1 号礫群	YLM	J-004	451.6		被熱
82	2	1 号礫群	YLM	J-004	500.1		
83	2	1 号礫群	YLM	J-004	596.0		被熱
84	2	1 号礫群	YLM	J-004	229.3		
85	2	1 号礫群	YLM	J-004	150.5	①	
86	2	1 号礫群	YLM	J-004	122.2	①	
87	2	1 号礫群	YLM	J-004	248.7		
88	2	1 号礫群	YLM	J-004	455.8		被熱
89	2	1 号礫群	YLM	J-004	360.7		
90	2	1 号礫群	YLM	J-004	202.6		
91	2	1 号礫群	YLM	J-004	237.7		
92	2	1 号礫群	YLM	J-004	113.3		
93	2	1 号礫群	YLM	J-004	249.2		被熱
94	2	1 号礫群	YLM	J-004	218.2		
96	2	1 号礫群	YLM	J-004	285.3	②	被熱
97	2	1 号礫群	YLM	J-004	9.8	②	被熱
98	2	1 号礫群	YLM	J-004	264.9		被熱
99	2	1 号礫群	YLM	J-004	125.1		
149	2	1 号礫群	YLM	J-004	621.4		
150	2	1 号礫群	YLM	J-004	266.5		被熱
151	2	1 号礫群	YLM	J-004	147.4		
152	2	1 号礫群	YLM	J-004	779.7		被熱
153	2	1 号礫群	YLM	J-004	330.0		被熱
154	2	1 号礫群	YLM	J-004	476.0		
100	2	2 号礫群	YLM	J-005	137.2		被熱
155	2	2 号礫群	YLM	J-005	712.9		
157	2	2 号礫群	YLM	J-005	88.5		
156	2	2 号礫群	YLM	J-005	506.8	③	
158	2	2 号礫群	YLM	J-005	396.8	③	

遺物番号	区	遺構	層位	グリッド	重さ（g）	接合番号	備考
126	2	3 号礫群	YLL	J-005	765.9		被熱
127	2	3 号礫群	YLL	J-005	267.9		被熱
128	2	3 号礫群	YLL	J-005	350.9		
129	2	3 号礫群	YLL	J-005	721.6		
130	2	3 号礫群	YLL	J-005	284.0		
131	2	3 号礫群	YLL	J-005	286.3		
132	2	3 号礫群	YLL	J-005	215.2		被熱
134	2	3 号礫群	YLL	J-005	429.6		被熱
133	2	3 号礫群	YLL	J-005	112.6		被熱
135	2	3 号礫群	YLL	J-005	191.8		被熱
136	2	3 号礫群	YLL	J-005	333.5	④	
137	2	3 号礫群	YLL	J-005	202.9		
138	2	3 号礫群	YLL	J-005	611.9		被熱
139	2	3 号礫群	YLL	J-005			
140	2	3 号礫群	YLL	J-005	202.4		
143	2	3 号礫群	YLL	J-005	398.0		
144	2	3 号礫群	YLL	J-005	333.4		
145	2	3 号礫群	YLL	J-005	296.5		被熱
146	2	3 号礫群	YLL	J-005	679.7		
147	2	3 号礫群	YLL	J-005	369.1		被熱
148	2	3 号礫群	YLL	J-005	408.3	④	
159	2	3 号礫群	YLL	J-005	1258.9		
160	2	3 号礫群	YLL	J-005	492.0		被熱
161	2	3 号礫群	YLL	J-005	510.8		被熱
162	2	3 号礫群	YLL	J-005	360.8		
163	2	3 号礫群	YLL	J-005	968.6		
164	2	3 号礫群	YLL	J-005	560.1		
165	2	3 号礫群	YLL	J-005	437.2		被熱
166	2	3 号礫群	YLL	J-005	196.1		被熱

第２節　遺物

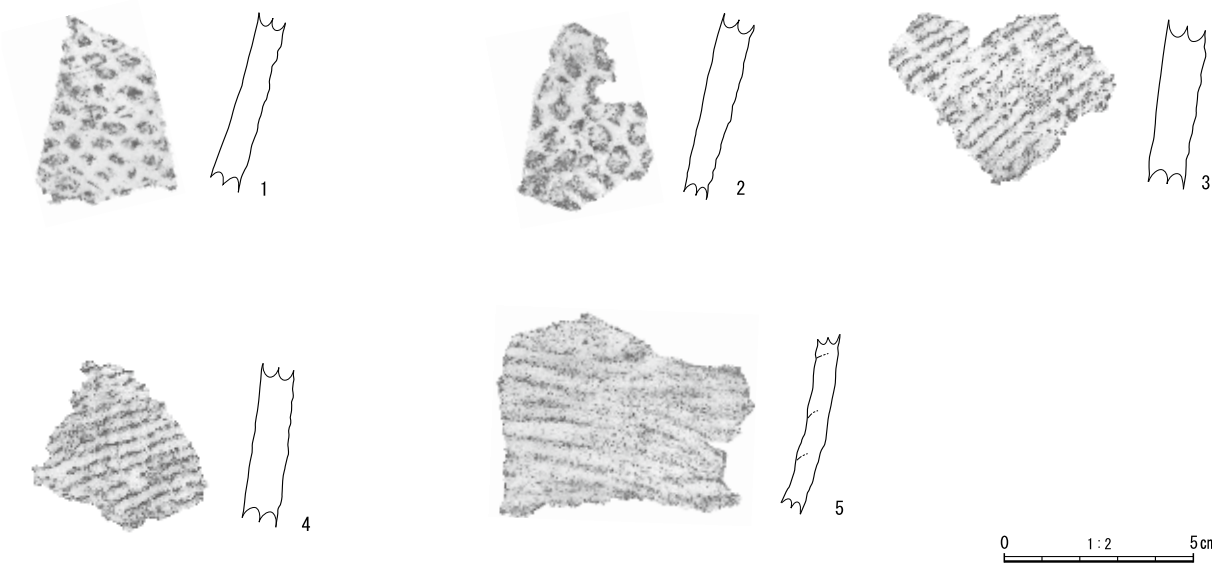
遺物総数は 171 点である。内訳は、土器が 13 点、石器類が 17 点、礫（遺構構成礫含む）が 141 点である。土器のうち８点は明らかに縄文土器であるが、弥生時代の可能性のある１点（第 18 図５）及び弥生時代以降の土器と思われる４点（註２）がある。石器類のうち、旧石器時代のものと考えられるものが 10 点、それ以外の７点は縄文時代と思われる。

なお、遺構に伴った遺物は、旧石器時代の１号礫群（RG １）を構成していた尖頭器（第 20 図 14）のみである。

１　土器（第 18 図）（図版８－１）（第６表）

前述したとおり、今回の調査で出土した土器は、弥生土器の可能性のある１点、弥生土器または土師器と思われる４点を除き、縄文土器であった。過去の本遺跡（No.27 －１地点のみ）の調査では、縄文土器以外の土器の出土は無いとされている。今回の調査での土器の出土量は僅少であり、かつ小片が多く、図化できるものは僅かである。

第 18 図１・２は早期中葉の押型文土器で、両者とも楕円押型文が施文されている。１は明らかに横方向を意識して施文されている。２は楕円文の粒が１に比べて大きく、また走行も不明確で乱れた感じ



第 18 図　出土土器実測図

第６表　出土土器観察表

番号	遺物番号	区	時期	グリッド	層位	X 座標	Y 座標	Z 座標	胎土	焼成	色調		備考
											内面	外面	
1	45	2	縄文	J-6	KU	-93656.235	28090.648	152.810	密　白色粒子・石英粒・1㎜白色礫含む。繊維混入	良	10YR5/3 にぶい黄橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	
2	13	1	縄文	K-9	FB	-93645.440	28120.133	159.300	密　石英粒多く含む。雲母粒少量含む。繊維混入	良	10YR6/4 にぶい黄橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	
3	2	2	縄文	J-5	AN	-93656.583	28081.906	152.395	密　雲母粒・1㎜白色礫・8㎜以下砂礫含む	良	10YR4/2 灰黄褐色	7.5YR6/6 橙色	縄文原体：Ｌの横方向
4	34	2	縄文	J-5	AN	-93656.237	28081.924	152.351	密　石英粒・白色粒子多く含む。2㎜以下砂礫含む。雲母粒わずかに含む	良	10YR4/3 にぶい黄橙色	7.5YR5/4 にぶい褐色	縄文原体：Ｌの横方向
5	65	2	縄文	J-6	SSC	-93654.033	28093.504	153.184	密　2㎜以下砂礫多く含む。2㎜長石含む	良	10YR7/4 にぶい黄橙色	10YR7/6 明黄褐色	

を受ける。１は白色粒子が目立つ胎土である。２は僅かだが繊維を含んでいる。破片が小さいため、確定的には言えないが、ともに密接施文の押型文であろう。

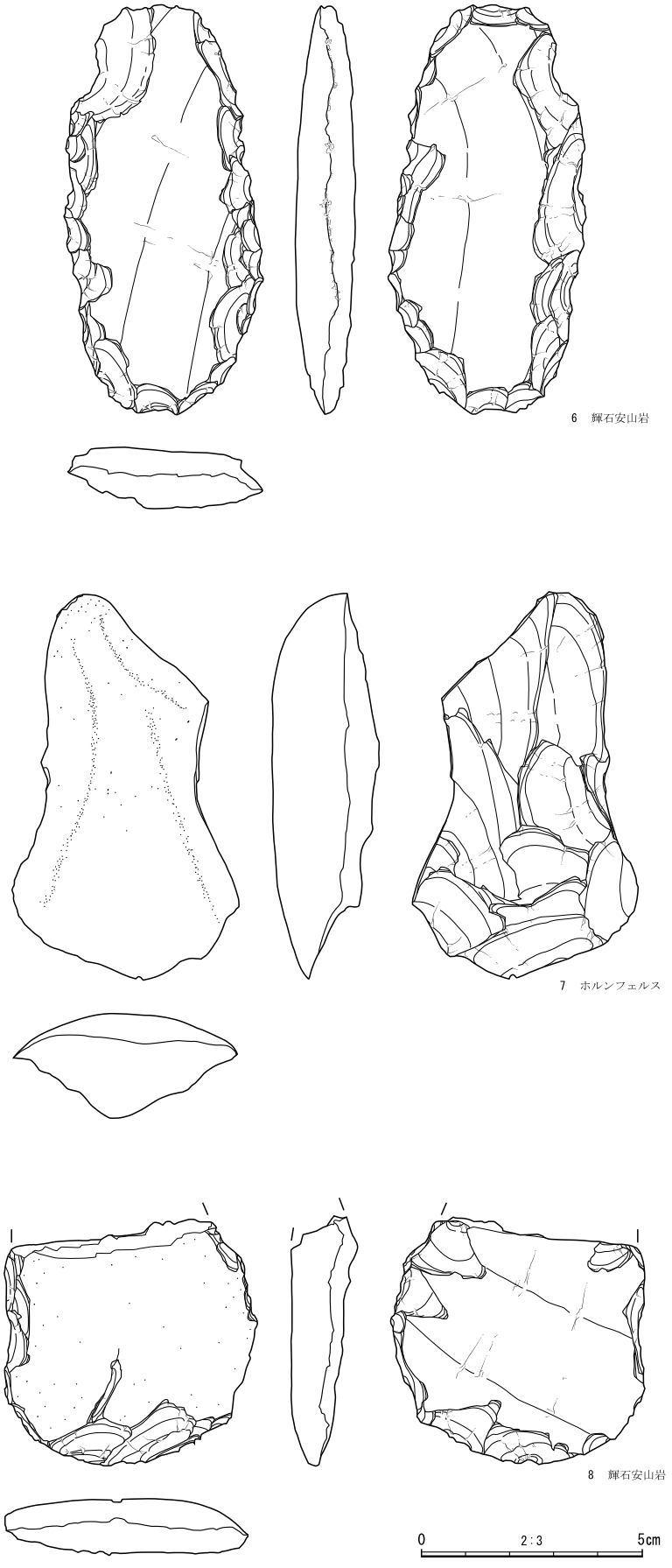
３・４は接合しないが明らかに同一個体である。無節縄文Ｌを施文する。小石等を多く含む粗い胎土である。縄文前期以降であろう。５は横方向を主にした条痕文のみが施文されている。条痕文は、条溝は浅く広く、条間は非常に狭い（註３）。濃いクリーム色を呈する胎土である。黒色粒子を多く含む。裏面は輪積みの痕跡を残しているがよくナデられている。器壁は薄い。新期スコリア層（NSC）から出土した。この破片は胴部であり情報量が少なく、明確な時期比定は困難である。縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半の枠内で捉えるしかない。

２　石器（第 19・20 図）（図版８－２～４）（第７表）

（１）縄文時代の石器（第 19 図）（図版８－２）

縄文時代の石器としては打製石斧３点のみ図示した。６は短冊形でほぼ完形である。表面左上の抉りは破損の可能性がある。薄めの剥片を使用し、表裏ともに、周辺部にやや細かい二次加工の剥離を全縁部に行っている。表面の中央部は、実測図では剥片作成時の大きな剥離面としているが、自然面の可能性もある。輝石安山岩製であろう。２区の暗褐色土層（AN）から出土した。

７は１区の攪乱土中から出土した。上部は片側が欠損している。



第 19 図　出土石器実測図（縄文時代）

表面は無加工であり、裏面には粗い剥離面が全面に見られる。ホルンフェルス製で、やや風化が進んでおり、不明瞭な部分はあるが、細かい調整剥離は行っていないと思われる。

８は打製石斧の残欠である。上側の割れ口は比較的新しい感じを受ける。表面は大半を自然面として残している。２区の栗色土層（KU）から出土した。輝石安山岩製であろう。

以上の３点のうち７を除く２点がAN ないしKU の出土であることから、これらの打製石斧が中期以降の所産であると考えたい（註４）。

以上の他に、円礫の周囲が薄く剥がれ、自然面が完全に残存している剥片が３点出土している。しかし、二次加工がみられないため、ここでは扱わなかった。

（２）旧石器時代の石器（第20図）（図版８－３・４）

旧石器時代の石器では７点を図示した。このほかに実測図を掲示しなかったが、写真図版のみで掲示したものが３点ある（後述）。この中には縄文層（ZN 層より上部）から出土したが、明らかに旧石器時代の石器であるものが含まれている。

９～13 は黒耀石製の石器である。９は二側縁加工の黒耀石製ナイフ形石器。やや大型で縦長剥片を素材にして、打点部側を基部にし、打面を残している。左側縁部及び右側縁部下半に二次加工を施し、基部がやや丸みを帯びるように仕上げている。刃部には使用痕がわずかに認められる。薄い剥片が使用されており、透明度の高い石材である。諏訪星ヶ台群。富士黒土層（FB 層）最下部出土。

10 は１区北側のＬ－９グリッドから出土した。黒耀石製の抉入削器と思われる。ただし、右側側面の抉り状の剥離は新しい可能性がある。神津島恩馳島群である。FB 層下部より出土している。

11 も黒耀石製の抉入削器である。１区のFB 層より出土した。打点を上にした縦長剥片を使用し、打点を残している。右側面に二次加工で抉り部をつくり、左側面部には自然面を残している。下端部には折断面が見られる。諏訪星ヶ台群だがやや夾雑物が見られる。

12 は黒耀石製の楔形石器。２区の休場層上層（YLU）から出土した。諏訪星ヶ台群。

13 は幅広だが細石刃とみなせるだろう。諏訪星ヶ台群。２区の風倒木痕中のFB 層相当の土中から出土した。今回の調査では無かったが、過去の本遺跡の調査（№27 －１地点）において、細石刃を中心とした石器ブロックと細石刃核が検出されている。

14・15 は非黒耀石製の石器である。14 は１号礫群中より出土した、ガラス質黒色安山岩製の尖頭器。先端部に僅かな欠損があるが、ほぼ完形である。基部はやや丸みを帯びており、先端部との区別は比較的明瞭である。両面加工であり、二次加工は、石質の関係もあり、やや不明瞭である。

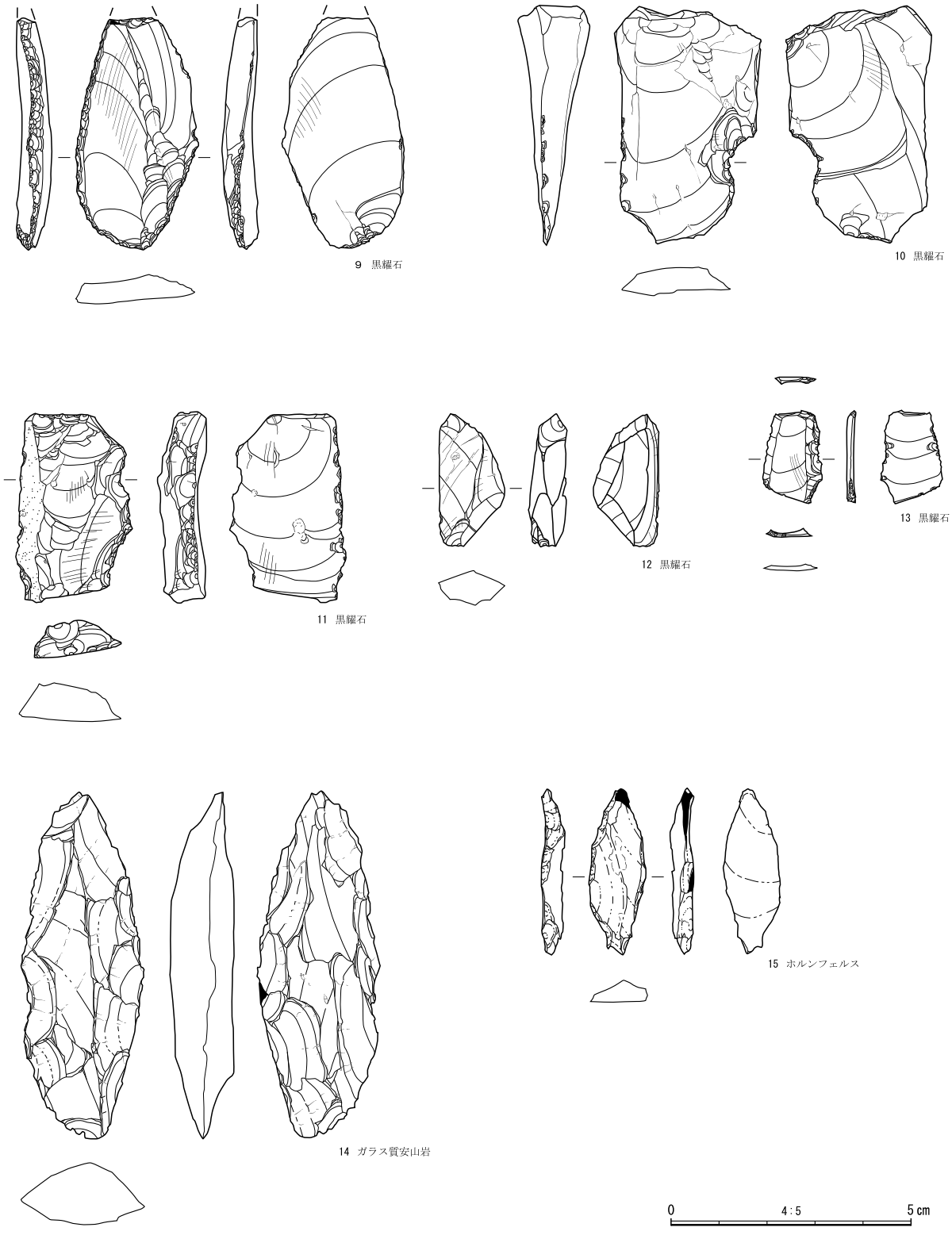
15 は二側縁加工と思われる小型のナイフ形石器。先端部は僅かに欠損していると思われる。基部は尖っており、先端とやや区別は付きにくい。打点は先端部側にあったと思われるが、除去されている。左側縁と右側縁基部側に二次加工を行っている。

写真図版８－３の16 は実測図を作成しなかったが、テストピット５から出土した黒耀石製の使用痕のある剥片である。第Ⅳ黒色帯（BB Ⅳ）の上部から出土した。元来は２つに折れて出土した。ただし、本来一体だったものが、掘削時の衝撃で折れた可能性もある。ただし、右側面に刃こぼれ状の使用痕が認められる。天城柏峠群で水和層が良く発達しており、全体が白っぽく見える。

写真図版８－４の17・18 は実測図は作成していないが、ともに２区の休場層中層完（YLM）から出土した剥片である。17 はガラス質黒色安山岩製の縦長剥片で、打面は残っていない。18 はホルンフェルス製で風化が著しく細部は不明である。

註

１．等高線入りの遺構全体図は過去の本遺跡の報告書（県埋文センター2013）と統一を図るため、それぞれの地形測面は、第１



第 20 図　出土石器実測図（旧石器時代）

面は富士黒土層（FB 層）上面、第２面は休場層（YL 層）上面、第３面は休場層直下黒色帯（BB O）上面とした。

①第１面のコンター面は FB 層上面であるが、第１面の遺構の検出面は、表土等直下、新期スコリア層（NSC 層）の残存部分の上面である。したがって、コンター面と実際の遺構検出面には齟齬が生じているが、過去の報告書と同様の記載を踏襲し、同一レベルにないコンター図と遺構図を同一図中に表現している。

第７表　出土石器計測表

挿図番号	遺物番号	区	時期	器種	グリッド	層位	X 座標	Y 座標	Z 座標	石材	ob 産地	重量（g）	長径（cm）	短径（cm）	厚さ（cm）	備考
6	49	2	縄文	打製石斧	J-5	KU	-93654.381	28085.797	152.497	輝石安山岩		66.7	9.30	4.40	1.35	
7	42	1	縄文	打製石斧						ホルンフェルス		96.5	8.70	5.10	2.40	
8	31	2	縄文	打製石斧	J-4	AN	-93654.776	28071.712	152.909	輝石安山岩		64.1	5.60	5.60	1.50	
9	3	3	旧石器	ナイフ形石器	M-8	FB 最下部	-93629.558	28119.646	160.764	黒耀石	諏訪星ヶ台	6.9	4.80	2.55	0.60	
10	41	1	旧石器	抉入削器	L-9	FB				黒耀石	神津島恩馳島	14.8	4.95	3.05	1.50	
11	43	1	旧石器	抉入削器		FB				黒耀石	諏訪星ヶ台	9.8	3.95	2.40	1.05	
12	106	2	旧石器	楔形石器	J-5	YLU	-93657.076	28088.223	151.832	黒耀石	諏訪星ヶ台	2.7	2.75	1.38	0.75	風倒木内
13	116	2	旧石器	細石刃	J-3	FB	-93653.570	28066.549	152.993	黒耀石	諏訪星ヶ台	0.5	1.90	1.25	0.18	
14	95		旧石器	槍形尖頭器	J-4	YLM	-93653.511	28078.837	151.712	ガラス質安山岩		22.6	7.20	2.60	1.30	1 号礫群
15	103	2	旧石器	ナイフ形石器	J-5	YLM	-93653.041	28087.688	151.870	ホルンフェルス		1.9	3.45	1.20	0.45	

②第２章第１節で述べたように、第３面の２区谷部のみ土層の比定を誤った状況で地形測量（航空測量）を行ってしまった。したがって、これに基づいて作成した地形測量図は、２区谷部に限っては誤りである。よって今回の報告ではこの部分（標高 152 m以下のコンター）を空白として遺構全体図を掲示する（第 14 図）。

２．第 18 図５の他に、弥生土器ないし土師器と思われる小片が４点出土している。いずれも器壁は薄く、小石を多く含む胎土で、脆弱である。口縁部が僅かに含まれている。この 4 点はいずれも NSC 層から比較的まとまった位置で出土しており、同一個体と考えられ、弥生土器ないし土師器と考えている。

３．「条溝」、「条間」の用語は松田光太郎氏の記述に従った（松田 2008）。

４．本遺跡の過去の調査では、早・前期の土器の大半は FB 層から出土していることを踏まえ、層位的に判断した。

第４章　まとめ

（１）旧石器時代

今回の調査で検出された遺構は、２区の近接した箇所から発見された礫群３基である。その他では遺物（礫含む）の散在的な出土はあったものの、ブロックとしてのまとまりは認識することができなかった。１区は旧石器時代上部層の残存状況が悪く、特に、遺物が多く出土すると予測された調査区の北側部分の休場層が全て失われていた。南側も残存状況は悪く、結果的にわずかに調査した１区南側の休場層からの遺構・遺物は皆無であった。

２区の中央やや東よりに、南北方向に走る埋没谷があり、３基の礫群は全てこの埋没谷の谷底部ないし谷底に至る斜面部で検出されている。第３章で詳述したように、この３基は全て暗赤褐色のスコリア層と関連しており、時期を判断する上で重要な情報を提供している。このスコリア層は、休場層を三分する際に鍵層となる休場層第２スコリア層（YLs ２）であり、このスコリア層より上層にあるという点で、第１・２号礫群の時期が休場層中層（YLM）であることが確定できた。ただし、２号礫群は、最下部が YLs ２に接している構成礫もあり、YLs ２との間に若干の「間層」をはさむ１号礫群に比べて古いと考えられる。３号礫群は、礫と YLs ２が同レベルであり、休場層下層（YLL）最上部から YLs ２にかけての所産と捉えるのが妥当である。したがって、１～３号礫群は、層位的には新旧関係が看取されるのであり、３号礫群→２号礫群→１号礫群の順で構築されたと考えられる。

過去の本遺跡の調査（№27 －１地点のみ）では、休場層を主とする第Ⅲ文化層から、９基の礫群が検出されており、そのうち、６基（RG22 ～ 24・26・28・29）からは、礫群の下にスコリア層が確認されている。報告者はこのスコリア層を YL － Sc と捉え、その上層に構築された礫群を休場層中層段階のものとしている（県埋文センター 2013）（註１）。この６基は、いずれも、今回の調査で３基の礫群が発見されたのと同一の埋没谷の、谷底部～斜面部に存在し、かつ、今回の調査区を挟む位置で南北から検出されている。したがって、今回の調査で検出された３基は、過去の調査の６基と一連のものと捉えるのが妥当である。合計して９基からなるこれらの礫群は、旧石器時代における谷部の土地利用を考える上で重要な素材を提供していると考えられるが、詳細は後考に待ちたい。なお、過去の調査で検出された６基は土層断面図を見る限り、全ての礫群で、スコリア層の上に「間層」を挟み礫が出土している。この状況は、今回の調査での１号礫群と同一のあり方であり、２・３号礫群と異なっている。これらの問題を踏まえて、礫群間の時間的関係を把握する必要がある。

今回の調査で、極めて少量の旧石器時代の石器が出土している。基本的には休場層の下～上層までであり、縄文時代層の FB 層からも出土している。第 20 図 13 の細石刃を除き、いずれも箱根・愛鷹編年の４期の石器群である（細石刃は５期）（高尾 2006）（池谷他 2010）。

テストピット調査で、TP ５から出土した黒耀石の剥片は、わずか１点とはいえ重要である。過去の本遺跡の調査において、第Ⅳ黒色帯を中心とした文化層を第Ⅰ文化層としている。過去の調査では、黒耀石製石器２点（近接して出土し、接合しているので実質的には１点）と礫３点が出土した。石器の出土位置は、今回の出土地点から約 310 ｍほど離れていて、出土位置の標高も大きく異なり、地形的にも複数の尾根と谷を挟んでいる。したがって、同一遺跡内とはいえ、出土層位という点からは一括りにはできない。また、今回の石器の出土位置は過去の調査の３点の礫の位置からも大きく隔たっている。したがって、今回の１点は本遺跡の第Ⅳ黒色帯の時代における人間の活動の痕跡を、位置的に大きく広げたことになるであろう。

（２）縄文時代

今回の調査で検出された縄文時代の遺構は、土坑２基、集石１基のみである。遺物は暗褐色土層（AN）から富士黒土層（FB）まで含まれる。新期スコリア層（NSC）からは確実な縄文時代の遺構は検出していない。集石は極めて小規模であり、FB 層中に礫が密着した状態で検出された。土坑は、いずれも休場層上面で検出したが、２基とも立ち上がりは FB 層中ないしはそれより上の層から掘り込まれた可能性が高い。土坑のうち一基（SK ５）は、陥穴の底部～胴部下半に形態が類似している。過去の調査では周辺に、まばらに陥穴状の土坑が分布している（SP148 ～ 150）ので、それと一連のものだと判断したい。

渕ヶ沢遺跡の過去の調査においては、縄文時代の遺構、遺物が特に集中している箇所は、比較的限定されている。最も集中しているのは､今回の調査の１区北側のすぐ東側の尾根部である。下段地区の５・６区にも集中地点が存在するが、今回の調査区と標高がかなり異なり、距離も離れている。今回の調査区の２区及び１区の北側部分は、前者の集中部の外縁部ということになる。過去の調査の５区では南北方向の埋没谷で、陥穴状のものを主とする土坑群とともに遺物が集中している状況が看取できる。今回の２区の調査でもほぼ同様のことが言えるだろう。

２区の新期スコリア層中から出土した条痕文土器は、胴部破片で条痕文が施されているのみで、詳細は不明であるが、縄文時代晩期後半～弥生時代中期前半の範囲に収まると思われる。本遺跡の過去の調査では明確に同時期の遺物は発見されていない（註２）。今回発見された、この時期の土器は本遺跡では初出である。縄文晩期後半～弥生前期後半の遺跡としては本遺跡周辺では、葱川遺跡（第１章第２図 11）が有名であるが、雌鹿塚遺跡（37）からも該期の遺物が発見されている。

（３）弥生時代以降

遺構としては２区から発見された３基の円形土坑のみである。第３章でも述べたが、過去の本遺跡の調査で検出された遺構（溝状遺構等も含む）は谷部に比較的集中する傾向がうかがえるが、今回の調査でもその傾向に違うものではなかった。円形土坑については、他遺跡も含めた、遺跡内でのミクロな位置関係等検討すべき点は多いが､今回の報告ではそこまで踏み込めなかった。今後の検討課題としたい。

遺物としては、前述の条痕文土器が弥生土器の可能性を有するほか、第３章の註２でのべたように、明らかに縄文土器と異なる土器が新期スコリア層から出土している。弥生土器ないし土師器に比定したが、前述したとおり、過去の調査では、弥生時代以降の遺物は出土していない。そのため、細片であっても重視されるべきであろう。

註

１．他の３基（RG ６･12･30）には土層断面が記載されておらず、詳細不明である。YL － Sc が存在したかどうか明らかではない。ただし、この３基は、本文中で述べた既報告の６基、及び今回報告する３基からは距離が離れており、除外して考えても問題はないであろう。

２．渕ヶ沢遺跡（県埋文センター 2013）報告書第１分冊 225 頁の 679 ～ 682 は、横帯弧線文や巴文、巴弧線文が存在せず、晩期の土器とみなすことはできない。後期後半段階として捉えるのが妥当である（静岡市教委 1990）（設楽 2008）。

引用・参考文献

池谷信之　2009 「旧石器時代における陥穴猟と石材獲得・石器製作行動
－愛鷹・箱根山麓 BB Ⅲ層期を中心として－」『駿台史学』第 135 号

池谷信之・富樫孝志・麻柄一志　2010 「第二章　旧石器文化の編年と地域性　五　中部地方」
『講座日本の考古学１　旧石器時代上』 青木書店

小野真一・笹津備洋　1971 「駿東郡原町葱川遺跡調査報告」『駿豆の遺跡研究』（１）

小林達雄編　2008 『総覧縄文土器』 アム・プロモーション

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2008 『元野遺跡』 静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第 189 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009a 『秋葉林遺跡Ⅰ』 静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第 207 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2009b 『イタドリＡ遺跡　イタドリＢ遺跡　イタドリＣ遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第 211 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010a 『秋葉林遺跡Ⅱ』 静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第 216 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010b 『沼津市井出・石川神ヶ沢の遺跡群』
静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第 223 集

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2010c 『的場古墳群・的場遺跡』
静岡県埋蔵文化財調査報告書調査報告第 227 集

静岡県教育委員会　1981 『静岡県の中世城館跡』

静岡県教育委員会　1988 『静岡県文化財地図Ⅰ　－静岡市以東－』

静岡県教育委員会　1988 『静岡県文化財地名表Ⅰ』

静岡県埋蔵文化財センター　2012a 『秋葉林遺跡Ⅲ』 静岡県埋蔵文化財センター調査報告第９集

静岡県埋蔵文化財センター　2012b 『鎌沢遺跡・銭神遺跡』 静岡県埋蔵文化財センター調査報告第 10 集

静岡県埋蔵文化財センター　2013 『渕ヶ沢遺跡』 静岡県埋蔵文化財センター調査報告第 30 集

静岡市教育委員会　1990 『蛭田遺跡』 本編　静岡市埋蔵文化財調査報告 23

設楽博己　2008 「清水天王山土器」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション

杉原荘介・小野真一　1965 「静岡県休場遺跡における細石器文化」『考古学集刊』第３巻２号

高尾好之　2006 「東海地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年的研究』 同成社

中野国雄　1983 「中世城郭の歴史的背景について（２）」『沼津市歴史民俗資料館紀要』７

沼津市　2002 『沼津市史　資料編　考古』

沼津市教育委員会　1980 『西大曲遺跡発掘調査概報』 沼津市文化財調査報告書第 20 集

沼津市教育委員会　1985 『平沼吹上遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第 36 集

沼津市教育委員会　1987 『沼津市埋蔵文化財分布地図』

沼津市教育委員会　1990 『雌鹿塚遺跡発掘調査報告書Ⅰ・Ⅱ　遺構編・遺物編』 沼津市文化財調査報告書第 51 集

沼津市教育委員会　2000 『鳥谷アラク遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第 75 集

沼津市教育委員会　2011 『井出丸山遺跡発掘調査報告書』 沼津市文化財調査報告書第 100 集

沼津市歴史民俗資料館　1983 『資料集（１） 柳沢・伊良宇禰』 沼津市歴史民俗資料館資料集４

羽二生　保　2013 「金雲母と植物繊維痕」『日本先史考古学論集』 六一書房

保坂　康夫　2012 『日本旧石器時代の礫群をめぐる総合的研究』

町田　洋他　2006 『日本の地形５　中部』 東京大学出版会

松田好太郎　2008 「貝殻文」『総覧縄文土器』 アム・プロモーション

付編　渕ヶ沢遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）

1　はじめに

沼津市根古屋に所在する渕ヶ沢遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

表１　分析対象一覧表

分析No.	遺物番号	出土層位	器種
1	3	FB 最下部	ナイフ形石器
2	41	FB 下部	抉入削器
3	43	FB	抉入削器
4	106	YLU	楔形石器
5	116	FB	細石刃
6	171	BB Ⅳ	剥片

2　試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器６点である（表１）。時期は、いずれも旧石器時代とみられている。試料は、測定前にメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光Ｘ線分析計 SEA1200VX を使用した。装置の仕様は、Ｘ線管ターゲットはロジウム (Rh)、Ｘ線検出器は SDD 検出器である。測定条件は、測定時間 100sec、照射径８㎜、電圧 50kV、電流 1000 μ A、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタに Pb 測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光Ｘ線分析によるＸ線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月 1999 など)。本方法では、まず各試料を蛍光Ｘ線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（Ｋ）、マンガン (Mn)、鉄 (Fe)、ルビジウム (Rb)、ストロンチウム (Sr)、イットリウム（Ｙ）、ジルコニウム (Zr) の合計７元素のＸ線強度（cps ; count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

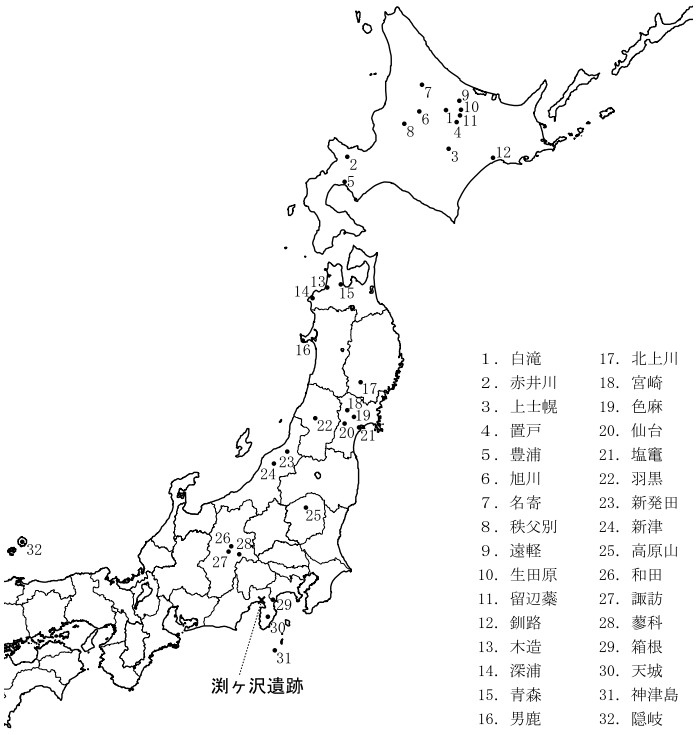
１）Rb 分率 =Rb 強度 × 100/(Rb 強度 +Sr 強度 + Ｙ強度 +Zr 強度)

２）Sr 分率 =Sr 強度 × 100/(Rb 強度 +Sr 強度 + Ｙ強度 +Zr 強度)

３）Mn 強度× 100/Fe 強度

４）log(Fe 強度 / Ｋ強度)

そして、これらの指標値を用いた２つの判別図（横軸 Rb 分率－縦軸 Mn 強度× 100/Fe 強度の判別図と横軸 Sr 分率－縦軸 log(Fe 強度 / Ｋ強度) の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、



1．白滝　2．赤井川　3．上士幌　4．置戸　5．豊浦　6．旭川　7．名寄　8．秩父別　9．遠軽　10．生田原　11．留辺蘂　12．釧路　13．木造　14．深浦　15．青森　16．男鹿　17．北上川　18．宮崎　19．色麻　20．仙台　21．塩竈　22．羽黒　23．新発田　24．新津　25．高原山　26．和田　27．諏訪　28．蓼科　29．箱根　30．天城　31．神津島　32．隠岐

図１　黒曜石産地分布図（東日本）

できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe 強度／K強度）の値が減少する（望月 1999)。また、原石データのない未知の産地については検討できない。試料の測定面にはなるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表２に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図１に各原石の採取地の分布図を示す。

３　分析結果

表３に石器の測定値および算出した指標値を、図２と図３に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んである。

分析の結果、４点が星ヶ台群（長野県諏訪エリア)、１点が柏峠群（静岡県天城エリア)、１点が恩馳島群(東京都神津島エリア）の範囲にプロットされた。表３に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。

４　おわりに

渕ヶ沢遺跡より出土した黒曜石製石器６点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、４点が諏訪エリア、１点が天城エリア、１点が神津島エリア産と推定された。

表２　東日本黒曜石産地の判別群一覧表

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地	
北海道	白滝	白滝１	赤石山山頂 (43)，八号沢露頭 (15)	赤石山山頂，八号沢露頭，八号沢，黒曜の沢，幌加林道 (36)
		白滝２	7 の沢川支流 (2)，IK 露頭 (10)，十勝石沢露頭直下河床 (11)，アジサイの滝露頭 (10)	
	赤井川	赤井川	曲川・土木川 (24)	
	上士幌	上士幌	十勝三股 (4)，タウシュベツ川右岸 (42)，タウシュベツ川左岸 (10)，十三ノ沢 (32)	
	置戸	置戸山	置戸山 (5)	
		所山	所山 (5)	
	豊浦	豊浦	豊泉 (10)	
	旭川	旭川	近文台 (8)，雨紛台 (2)	
	名寄	名寄	忠烈布川 (19)	
	秩父別	秩父別１	中山 (66)	
		秩父別２		
		秩父別３		
	遠軽	遠軽	社名淵川河床 (2)	
	生田原	生田原	仁田布川河床 (10)	
	留辺蘂	留辺蘂１	ケショマップ川河床 (9)	
		留辺蘂２		
	釧路	釧路	釧路市営スキー場 (9)，阿寒川右岸 (2)，阿寒川左岸 (6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸 (15)，鶴ヶ坂 (10)	
	深浦	八森山	岡崎浜 (7)，八森山公園 (8)	
	青森	青森	天田内川 (6)	
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉 (10)	
		脇本	脇本海岸 (4)	
岩手	北上川	北上折居１	北上川 (9)，真城 (33)	
		北上折居２		
		北上折居３		
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉 (40)	
	色麻	根岸	根岸 (40)	
	仙台	秋保１	土蔵 (18)	
		秋保２		
	塩竈	塩竈	塩竈 (10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前 (24)，大越沢 (10)	
		櫛引	たらのき代 (19)	
新潟	新発田	板山	板山牧場 (10)	
	新津	金津	金津 (7)	
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢 (22)	
		七尋沢	七尋沢 (3)，宮川 (3)，枝持沢 (3)	
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場 (30)	
		鷹山	鷹山 (14)，東餅屋 (54)	
		小深沢	小深沢 (42)	
		土屋橋１	土屋橋西 (10)	
		土屋橋２	新和田トンネル北 (20)，土屋橋北西 (58)，土屋橋西 (1)	
		古峠	和田峠トンネル上 (28)，古峠 (38)，和田峠スキー場 (28)	
		ブドウ沢	ブドウ沢 (20)	
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下 (20)	
		高松沢	高松沢 (19)	
	諏訪	星ヶ台	星ヶ台 (35)，星ヶ塔 (20)	
	蓼科	冷山	冷山 (20)，麦草峠 (20)，麦草峠東 (20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯 (20)	
		畑宿	畑宿 (51)	
		鍛冶屋	鍛冶屋 (20)	
静岡		上多賀	上多賀 (20)	
	天城	柏峠	柏峠 (20)	
東京	神津島	恩馳島	恩馳島 (27)	
		砂糠崎	砂糠崎 (20)	
島根	隠岐	久見	久見パーライト中 (6)，久見採掘現場 (5)	
		箕浦	箕浦海岸 (3)，加茂 (4)，岸浜 (3)	

引用文献

望月明彦　1999　上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定．大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書２―上和田城山遺跡篇―」：172-179，大和市教育委員会．

表３　測定値および産地推定結果表

分析 No.	K強度 (cps)	Mn 強度 (cps)	Fe 強度 (cps)	Rb 強度 (cps)	Sr 強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr 強度 (cps)	Rb 分率	Mn*100 / Fe	Sr 分率	log Fe / K	判別群	エリア	分析 No.
1	308.8	120.0	1155.9	764.6	288.4	382.3	737.8	35.18	10.38	13.27	0.57	星ヶ台	諏訪	1
2	150.6	78.3	983.1	245.8	316.4	202.9	503.1	19.38	7.96	24.95	0.81	恩馳島	神津島	2
3	332.1	131.6	1250.5	832.8	313.7	409.5	796.5	35.40	10.52	13.34	0.58	星ヶ台	諏訪	3
4	289.8	118.6	1109.8	738.0	283.2	370.9	712.3	35.07	10.69	13.46	0.58	星ヶ台	諏訪	4
5	275.0	111.4	1100.2	718.2	268.0	347.5	708.8	35.16	10.13	13.12	0.60	星ヶ台	諏訪	5
6	178.5	90.7	3046.0	258.0	629.6	371.2	1649.0	8.87	2.98	21.65	1.23	柏峠	天城	6

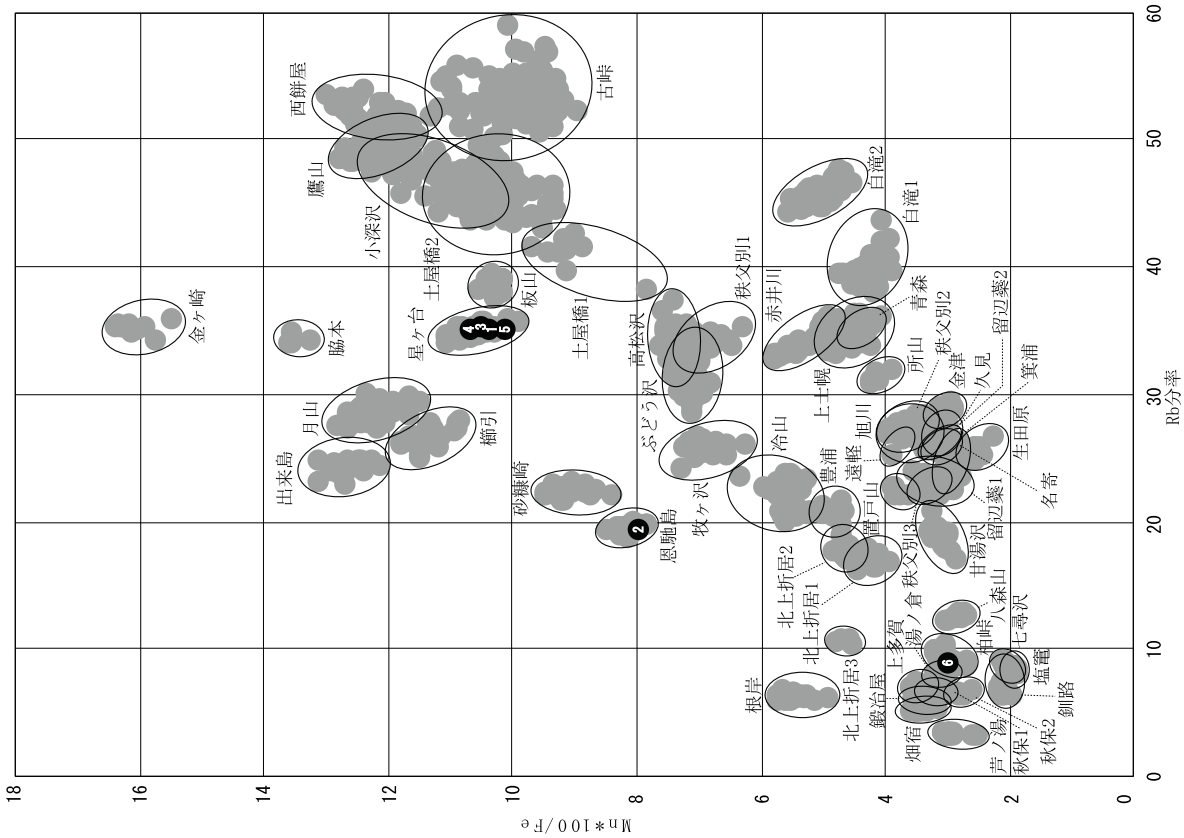


図２　黒曜石産地推定判別図１

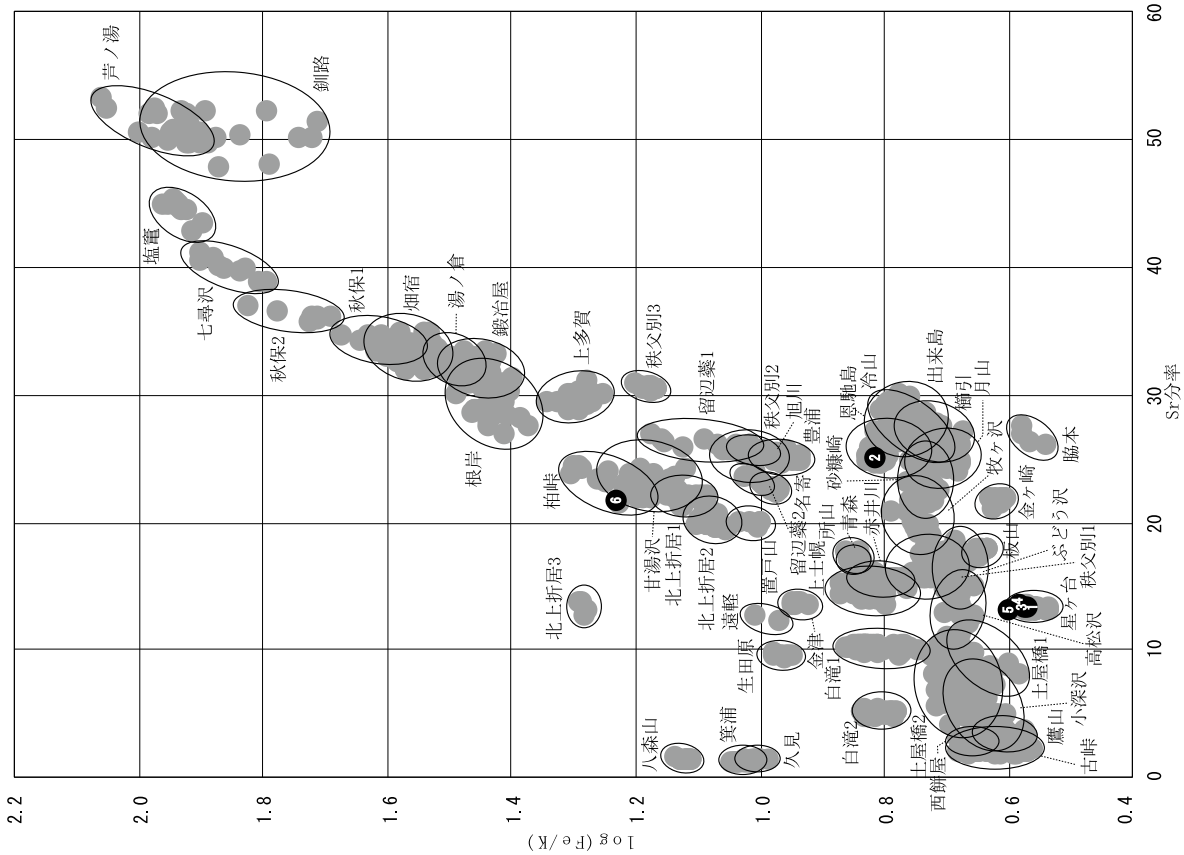


図３　黒曜石産地推定判別図２

1　第1面完掘状況（南から）

2　第2面完掘状況（南から）

図版2

1　第3面完掘状況（北西から）

2　2区北側土層断面1

3　2区北側土層断面2

1　1号土坑完掘状況（西から）

2　2号土坑完掘状況（南から）

3　3号土坑半截状況（南から）

4　3号土坑完掘状況（西から）

5　4号土坑完掘状況（北東から）

6　5号土坑完掘状況（南から）

7　1号集石検出状況（南から）

8　1号集石半截状況（南から）

図版4

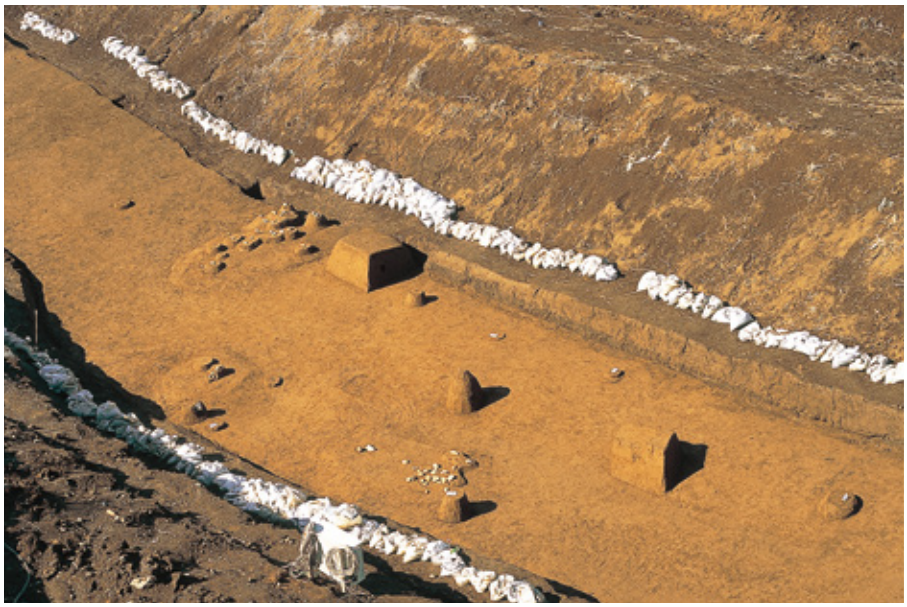
1　1号礫群（南東から）

2　1号礫群に伴った尖頭器
（南東から）

3　2号礫群（北西から）

図版5

1　3号礫群（南東から）



2　1～3号礫群とその周辺の
遺物出土状況（南東から）

3　第Ⅳ黒色帯石器出土状況
（TP5）（北から）

図版6

1　新期スコリア層～栗色土層中の遺物出土状況（南から）

2　1区北側富士黒土層中の遺物出土状況（北から）

3　2区富士黒土層～漸移層中の遺物出土状況（南東から）

4　TP 1北壁土層断面（南から）

5　TP 2北壁土層断面（南から）

6　TP 3東壁土層断面（西から）

7　TP 4北壁土層断面（南西から）

8　TP 5東壁（北側）土層断面（西から）

図版7

1　TP５東壁（南側）土層断面（西から）

2　TP６北壁土層断面（南西から）

3　TP７東壁土層断面（北西から）

4　TP８北壁土層断面（南東から）

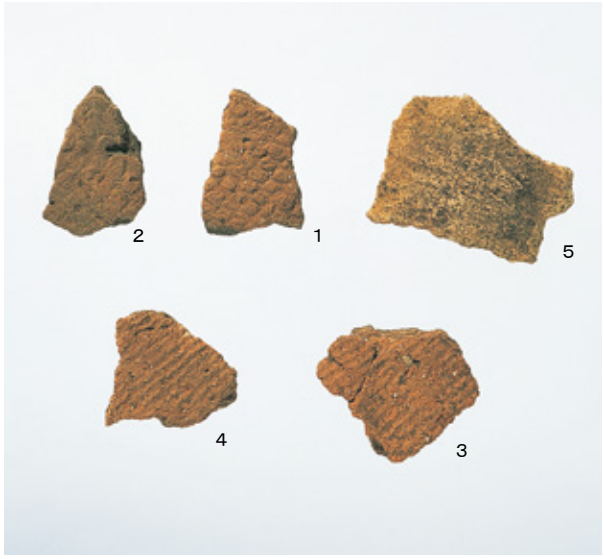
5　TP８東壁土層断面（南西から）

6　TP１・２完掘状況（南東から）

7　TP３・４・７・８完掘状況（南西から）

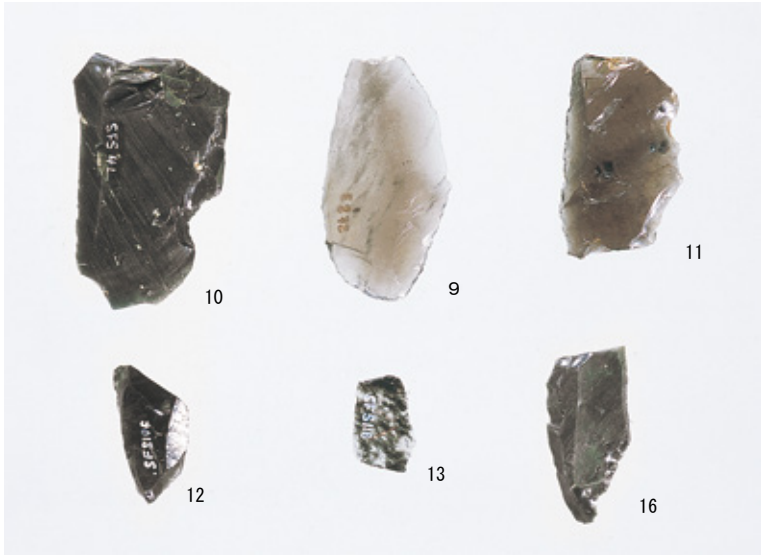
8　TP５・６完掘状況（北東から）

図版8



1　出土土器

2　出土石器（縄文時代）



3　出土石器（旧石器時代）1

4　出土石器（旧石器時代）2

報告書抄録

ふりがな	ふちがさわいせき
書名	渕ヶ沢遺跡Ⅱ
副書名	新東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財センター調査報告
シリーズ番号	第 55 集
編著者名	木崎道昭（編）　竹原弘展（株式会社パレオ・ラボ）
編集機関	静岡県埋蔵文化財センター
所在地	〒 421-3203　静岡県静岡市清水区蒲原 5300 番５号　　TEL　054 － 385 － 5500（代）
発行年月日	2017 年２月 28 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
ふちがさわいせき 渕ヶ沢遺跡	しずおかけんぬまづしねごや 静岡県沼津市根古屋 958-12 他	22203		35° 09′ 19″	138° 48′ 30″	20151019 ～ 20160311	1487	記録保存調査 （ヘリポート建設）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
渕ヶ沢遺跡	集落	旧石器時代	礫群	ナイフ形石器、尖頭器、抉入削器、細石刃、楔形石器、剥片等	
	集落 その他（狩場）	縄文時代 ～弥生時代？	土坑、集石	土器（押型文土器、条痕文系土器（縄文晩期～弥生中期前半）他）、打製石斧等	
	散布地	弥生時代？ ～古代？		弥生土器ないし土師器	

要約

今回の調査地点は、平成 11 ～ 20 年度までに行われた調査の未調査部分にあたる。南北農道跡を１区とし、それにＴ字状に交わる東西農道跡を２区として調査を行った。１区は路盤構築時に行われた地盤改良によって、休場層までの包含層は大半が破壊されていた。

旧石器時代の遺構としては埋没谷に近接して礫群３基が検出された。休場層第２スコリア（YS2S）中での時間差が考えられる。第１号礫群にはガラス質黒色安山岩の尖頭器が伴っていた。その他、ナイフ形石器、抉入削器、細石刃等が出土している。また、１区南側に設定したテストピットにおいて、第Ⅳ黒色帯の最上部から黒耀石製の剥片１点が出土した。

縄文時代の遺構は、陥穴状の土坑１基を含む、土坑２基と集石１基を検出した。遺物は極めて少なく、縄文土器、打製石斧等が２区を中心として出土した。縄文土器は早期の押型文土器等のほかに、縄文晩期後半～弥生中期前半と思われる条痕文土器が１片のみだが検出された。

静岡県埋蔵文化財センター調査報告　第55集
渕ヶ沢遺跡Ⅱ
新東名№27-1地点

新東名高速道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
沼津市－12

平成29年2月28日発行
編集・発行　静岡県埋蔵文化財センター
〒421-3203 静岡県静岡市清水区蒲原5300番5号
TEL　054-385-5500（代）
FAX　054-385-5506
印　刷　所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058 静岡県沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL　055-921-1839（代）
FAX　055-924-3898